
百獣の王

羽毛蛇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

百獣の王

【Nコード】

N3875BA

【作者名】

羽毛蛇

【あらすじ】

世界中の生き物を見て回りたい。そんな夢を持った日本人が「ONE PIECE」の世界に転生し、主人公一行と「自分だけの生物図鑑」を作る為に旅に出ます。

主人公は理論派修行ヲタで結構な強キャラなんですが戦闘描写より心理描写を描きたいので、その強さはあまり報われませんしチートと呼べるほどではありません。主人公はロビン登場に期待です。

作者の初投稿作品になりますので、ツッコミどころが多々あるかも

しねませんがよろしくお願ひします。

プロローグ（前書き）

はじめまして。作者の「羽毛蛇」です。

投稿は始めてですが、よろしくお願いします。

プロローグ

「コケコツコッ！！」

「……ん？」

目覚めるとそこは見知らぬ砂浜でした。

………はいいつ？

いやいやいや、ここ何処？マジで？

いや、落ち着け、まずは現状確認だ。俺は「藍沢あいざわ匠たくみ」中洲のホストだ。酒に飲まれるなんて俺らしくもねえ。

……あれ？………本名が思い出せん。

やべえな。相当酔っ払ってるみたいだけど、別に二日酔いつて訳でもなさそうだ。一時的な記憶障害か？世界中の生き物を見て廻る為の資金集めでホストなんかやってんだから、記憶障害になるまで飲むなんて馬鹿らしい。まあ、酒は好きだけど。

てかここは本当に何処なんだ？百地浜？……百地にこんな森はないな。ていうか俺は泳げないから海には近づかん。

まあ、じっとしていてもしょうがないし、どっか見覚えのある場所まで歩くか。流石に酔っ払って福岡から脱出してることは無いだろ

うし。

「コケコツコッ!」

さて、歩き始めて1時間。

海です。ただひたすらに海です。

なんで？海岸沿いに1時間も歩き回って左手に海、右手に森。こんな場所はしらん。ていうか森っていうよりジャングル(?)に見えてきた。なんかジャングル(笑)から鶏の声聴こえてるのも意味不明だし、ちよつと見にいつてみるか。鶏かわいいしね。

.....

結論から言おう。こんな鶏はいねえ!!

鶏冠があるし尾は鶏なんだが、体は何故か狸っぽかった。

UMAを発見したので取り敢えず捕獲。携帯で写メろうとしたんだけど、なんか携帯もなかった。この時点で俺は現状を夢だと断定した。何があっても商売道具の携帯を手放す訳が無い。

だから兎みたいな蛇がいても、ライオンみたいな豚がいてもしょうがない。スルーライフを決めこんだ。

・・・でも、この変な生き物を何処かで見たことがある気がする。
大好きな漫画で。某ハンター漫画だったか？

そんな事を考えながらポケットからタバコを探していると、

「それ以上踏み込むな!!」

何処からか、ていうか箱からモジャンボが生えてる（笑）辺りから
声がした。

ああ「ガイモン」だ。という事はこの夢は「ONE PIECE」
か。「ONE PIECE」は2番目に好きな漫画だし暫く夢を観
てるのもイイかな？

「くらあ!!無視すんな!!さつきからポケットとしやがって!早く
そいつを放せ!!」

「そいつ?」

「お前が抱えてる鶏だよ!!!放さなければ貴様は森の裁きを受け
その身を滅ぼす事になるのか?」

やっぱ疑問系なんだ（笑）そんな事いわれても夢の中でしか触れな

い不思議生物なんだから、そう簡単には手放せない。それにこいつはどちらかというところ鶏っぽい狸だ。あれ？そういえば夢の中なのになんでモフモフ感を感じられるんだ？

「だから無視すんなって！！もういい！森の裁きを受けろ！！」

ズドオン！！

「・・・つてえ？」

なんだこの痛み？チリチリと焼ける様な痛みがする頬を撫でると、手には真紅の血。

その生温い鮮血と徐々に麻痺していく頬の痛みは余りにもリアルで俺は本当に「ONE PIECE」の世界に来て仕舞ったんだと唐突に理解した。

プロローグ（後書き）

いかがでしたか？ってまだ原作と絡んでませんけどね（笑）

プロローグがうざいと評判の作品ですが、ここ変えるとなんか違う気がするのでこのままいきます。

どんなにけなされようが最後まで投稿します。作者はしつこいし暇なので。

珍獣島(仮)でマシオカで叫ぶ(前書き)

地の分が多いですが主人公の過去なので多めに見てください。

珍獣島（仮）でマシオカで叫ぶ

「やったー——————」
「！！！！」

「うおっ！お・・・お前なんだ！！！！いきなりどうした？Mか？Mなのか？」

俺は間違いなく「ONE PIECE」の世界にやってきた。それを理解した1番素直な気持ちだった。

だって「ONE PIECE」だぞ！？珍獣だらけじゃん！碌な遊び道具も与えられず英才教育だかなんだか知らんが物心ついた時から勉強ばかりさせられていた俺にとって百科事典に載っていた動物たちの挿絵を見るのは唯一の楽しみだった。

いつか自分の目でこいつらを見てみたい。夢の中での俺は世界中の動物たちと友達だった。幼稚園のお受験には初歩的な動物たちの知識も必要だったからだろうか、両親は百科事典じゃない動物だけの図鑑も頼めば買ってくれた。勉強は好きだったからそんな感じで俺はいい子ちゃんに育った。

小学校5年生の時、宿泊学習に友達が漫画を持ってきた。某ハンターが主人公のその漫画は俺の心を揺さぶった。衝撃だったんだ。欲しいものを自由に追い求めるその職業が。俺は将来ハンターになる。そんな子供らしい夢を持った。

家に帰って両親にその話をすると・・・キレた。それも烈火のごとく。

そして俺は愚れた。こちらも烈火のごとく。「健全な精神は、強靱な（？）肉体に宿る」とか言っただけに俺に空手と柔道、ついでにサバットまで習わせていたくせにメタボだった親父は小学5年生にそりやもうあっさりと負けた。

表面上は和解したが親父の関心が2つ下の弟に移ったのをいいことに俺は本格的にハンターになる準備を始めた。あの一件以来俺の頼みを大概聞いてくれる親父に頼んでネット環境を整え、知識を吸収した。中学3年になる頃にはさすがにハンターになろうとは思ってはいなかったが、それでも世界の生き物を見て回ることは夢見ていた。

高校を卒業すると同時に家から放り出され、自分で生きていくことになった。マンションの1か月分の家賃しか払われてなかったのであわてて仕事を探していたらホストクラブの店長に声をかけられ月締め即給というその店のシステムに引かれて入店した。

まあ結果を言えば天職だった。入店一ヶ月でNo.1になりそれから6年その地位を守り続けて稼ぎまくった。少々贅沢をしても遊んで暮らせるお金はとくにあっただが、俺は世界を旅するつもりなのでまだまだ稼ぐつもりだった。

いきなりこの世界に飛ばされてお金は無駄になったが、この世界には元の世界じゃ考えられないような珍獣がわんさかいる。楽しみでしようがない。

「聞けえー！ー！！頼むから話を聞いてくれ（泣）」

どうやら俺が長い回想に浸っている間、ガイモンさんはずっと俺に話しかけ、もとい叫んでいたらしい。悪いことをしてしまった。

「いやあ、すみません。この島にこれたのがうれしくて」

「なに！？お前はそんな小さななりで海賊か？いや、鶏を放さねえ所を見ると密猟者か！？」

だからこいつは狸だったのに、いや1回もツツこんでなかったか。それはいいとして小さななり？俺は24歳、身長は186cmだぞ？小さくはないだろ？まあこの世界では身長3Mとかの人間がいるからでかくはないだろうが、そういえば俺の声がずいぶん高く感じるし視線が低い。

?????・・・いやな予感しかしねえ。

「おじさん鏡もってる？この子放してあげるから貸して？」

「鏡？ほれ。ちゃんとそいつ放せよ！」

ガイモンさんが鏡を放つてよこす。要求しといてなんだがガイモンさんが普通に鏡を持ち歩いていることに驚いたがこの際それはスルーだ。えらくかわいらしいデザインにも驚いた（若干引いた）がそれもスルーだ。俺のスルースキルは割りと高い。

恐る恐る鏡を覗き込み愕然とする。

「誰だお前!？」

不意に思い出す。俺はバースデイイベントであまりに飲みすぎて急アルで倒れたんだ。意識はあった。呼吸が止まっていくのもなんとなくわかった。

「ああ、俺、死んだんだ」

どうやら俺は異世界漂流者ではなく、異世界転生者だったようだ。

ガイモンさんといっしょ（前書き）

ガイモンさんとの生活です。

ガイモンさんといっしょ

というわけで俺は転生者だったようです。ちなみに転生してから浜で起き上がるまでの記憶はありません。でも一緒に打ち上げられていたっぱいかばんの中にはかなり上質な紙（この世界では貴重なものらしい）で出来た分厚い動物図鑑、サバイバルナイフ、釣竿、キャンプ用品、手帳に筆記用具。さらには見た目7歳程度なのにかなり鍛えられた身体。おそらくこの世界で幼き頃の夢、ハンターを指していたんだらう。さすが俺！ブレが無い！！

ガイモンさんによるとこの近海を昨夜大嵐が襲ったらしいので、それでこの島に流れ着いたのだらう。まあ俺のことだから最初からこの島を目指していた可能性もあるが。

あ、俺の容姿を説明するとデビルメイクライのダンテだね。小さいけど。銀髪です。目まで灰色でした。何故でしょう?? まあイケメンなので許す!! 元の世界でも顔はそこそこよかったのであまり感動は無いがダンテは好きなキャラクターなのでそこはかとなく嬉しい。

必要最低限の事しかガイモンさんと話さず考え込んでいたり俺を最初は不審がっていたが狸（ここは譲れない）を開放したことで動物談義をしたことよって今は仲良くなった。もはや親友だ！ガイモンさん今まで珍獣島を守ってくれてありがとう・・・（泣）この島にいる間は手伝うよ!!

Side ガイモン

可笑しなやつだ。

最初は海賊か密猟者かと思った。大海賊時代は子供に残酷だ。俺のいた一味みたいに気のいいヤツ等ばかりじゃねエ！海賊に親を殺された孤児なんて五万といる。そんなヤツ等が海賊になることなんて別に珍しい事でもねえ。だが、どうやらこいつは違うようだこいつの鞆の中身を見たときはやっぱり密猟者じゃねえかと思ったが、味の記録の為に一匹仕留める以外、必要以上には狩らないらしい。

どうやら生き物のすべてに興味があるらしく、姿や生態、食用時の味まで記録した動物図鑑を作るのが子供の頃からの夢だそうだ。今でも十分に子供だと思っただがそのことを聞くとはぐらかされた。

アイザワ・タクミという名前とハンター（駆け出しらしい）という職業だった事以外はほとんど覚えてないらしい。暫くこの島の調査をしたいと言い出したのでこいつの眼を見据えると真っ直ぐないい眼をしてやがった。2つ返事で了承してやると、

「俺たちは親友だ！！！」

なんて、こっぴどかしいことを言いながら抱きついてきやがった。

可笑しなヤツだ。

ガイモンとこの島で暮らし始めて2ヶ月が経った。島の動物たちの調査はあらかた終わり、今は釣りでその日の食料を確保しながら魚類の調査と、この世界の植物の知識をガイモンに学んでいる。まあガイモンにわかるのは喰えるか喰えないかぐらいのもんだが・・・

二人で生活するうちにガイモンは俺の料理の腕を気に入ってくれたようだ。俺は料理にはちよっと自信がある。世界を旅するためにはとサバイバル技術を元の世界で学んでいた頃、まずい飯は食いたくないと思ってサバイバル料理術を独自に学んだ。

仕事が休みの日は山奥の自然地にキャンプに行ったりして訓練をしていたので、レストランの厨房に慣れているサンジには負けないつもりだ。まあ作れるのは所謂The男飯だけなのだが・・・

ちなみに空の宝箱は確認済み。ガイモンはちよっと悲しそうだったけど原作ほど号泣はしていなかった。まあその理由はガイモンがこの島にいる期間がまだ3年だという事が大きいだろう。俺は暫くしたらこの島を出るつもりなのでガイモンも一緒に来ないかと誘ったのだが、

「森の番人を続けてエんだ」

と、原作どつりのことを言っていた。3年で自分の生涯をかけて守っていくほどの情を抱くなんてやっぱりガイモンはいいヤツだ。

悪魔の実(前書き)

主人公には能力者になってもらいます。

悪魔の実

そんなこんなで日々を過ごしながらそろそろイカダでも作ろうかなんて考えていたある日、

「お〜い・・・タクミ〜！珍しい果物を見つけたんだ！食ってみねエか？」

と果物を持ってきた。ガイモンにしては珍しくきちんとカットされている。

「皮剥く前に持ってきてよ。どんな果物かわかんないじゃん」

「あつ！すまねエな〜お前エに植物の事教えるなんていつときながら。ま、どっちにしろこいつは俺も始めてみる果物だから！喰えるかどうかはわからねエ！！」

「そついう問題じゃないんだけどなあ・・・」

そう言いながらも、せっかくガイモンが採って来てくれたんだし、いざとなったら食中りに利く薬草もあるし（タクミが発見した）。という事で取り敢えず喰ってみた。

「(まつずつつ)つつ!!!!!!」

何というか強烈な味がした。だが吐き出すのも見つともないので何とか飲み込んだ。

「ガイモン!!!!!!なんだよこれ!!!!!!滅茶苦茶まずいぞ!!!!!!」

「はっはっはっは!!!!!!まあ見るからに不味そうだった!!!!!!お前がどんな顔して喰うか見てやりたくてなァ!っはっはっはっは……!!!!!!」

ガイモンはまだ笑っている。ちょっとムカつく!一発殴ってやろうか?いやサバット仕込の蹴りを……いや……殺してやるう……?……?……!?

なんで!?俺はこんな事ぐらい一発軽めに殴って赦してやる筈だ。こないたずらファミレスで究極にまずいドリンクを作成して飲ませる遊びと変わらない。なのに俺はこんな事で一瞬だが本気でガイ

モンを殺そうと決意した。明確な殺意だ・・・

ふと我に返ってガイモンを見てみるとなにやら脅えている。

「ガイモン??どした???」

努めて明るく聞いてみるが、尚も脅えた様子で、

「タクミ???. . . さっきのありや何だ???」

「さっきのアレ??」

『わけがわからないよ』・・・ふざけてる場合じゃなかった。ガイモンの脅えっぷりは少々異常だ。まさか俺が霸王色の覇気を使えるわけでもないし・・・使えるのか？

試してみようと思い、やり方が解らないので先ほどと同じようにガイモンに殺気を強く向けてみる。気絶したら後で謝ろう。

ガイモンは気絶こそしないが今にも叫び声を上げそうだ。霸王色が使えてるのか?と疑問に思っていると俺の目線が段々と上がってきて、それに合わせて体中に力が漲ってきた。腕を見ると太く毛深くなっており、立派な爪が生えている。

ガイモン愛用のかわいい鏡をガイモンのアフロの中からひったくる。
替えるガイモンをスルーして鏡を覗き込み、・・・・・・・・一度吼えて
みた。

「ガアアオオウ!!!」

そこには一風変わった百獣の王、銀髪の獅子がいた。

悪魔の実（後書き）

タイトルの由来です。

銀髪の獅子（前書き）

主人公の今後の方針が決まります。

銀髪の獅子

”動物系”^{ソオン} ネコネコの実 モデル ”獅子”^{ライオン}

どうやらこれが俺の喰った悪魔の実の名前のようだ。獣形態の姿からして間違い無いだろう。

俺はライオンが好きだ！むかしどっかのテレビ番組で陸上最強の生物はホツキョクグマだの何だの言っていたがそんなモン知らん！最強の陸上生物はライオン！俺は信じている！！！

だから喰った悪魔の実がこの実だったことはすごく嬉しいし、人獣形態の自分を見たときはかなり興奮した！でも、悪魔の実を食べてしまった事自体が問題だ。

これじゃあイカダでこの島から脱出するのはメチャクチャ危険だし、なにより海中生物の調査が釣りに限定されてしまう。

俺が酷く落ち込んでいるのを見てさっきまで脅えていたガイモンが謝りつつ慰めてくれた。こんな姿（人獣形態から戻り忘れていた）の俺を怖がらないようにしてくれるなんて・・・ちよっぴり箱が震えているけど、やっぱりガイモンはいいヤツだ。

肉食系の凶暴性を抑えて人形態に戻る。この制御はかなり気を使う。自在に操っていたルツチ、ジャブラやチャカは凄いな。俺も練習し

よう。

島の脱出はおそらく出来る。俺には航海術も無いがこの身体があればおそらく「六式」がきつ「月歩」を極めれば何とかなりそうだな。この世界は空気にプロテイン入ってるの？ってくらい鍛えればみんな強くなる。純粹に肉体が強化される動物系の悪魔の実を喰ったことだしいつか出来るようになるはず。

問題は海洋生物調査………あれ？簡単じゃね？麦わらの一味にはいいんだ！！ルフィはなんたって主人公だきつと俺がいたって海賊王になる！！ゾロは海王類とか仕留められそうだし、ナミにはシキが眼をつけるほどの航海術がある。ウソップにはスゲー釣竿作ってもらえそうだし、サンジの夢は「オールブルー」半分俺の夢とかぶってるようなもんだ。チョッパーにはランブルポールでの悪魔の実の可能性拡大を手伝って貰えるし、何よりチョッパーが珍獣。フランキーには「シャークサブマージ」を強化版として作っていただきたい。ブルックは……海賊は歌うんだぜ！！

そしてなによりロビン！！ニコ・ロビン！！好みなんです！タイプなんです！！好きなんです！！大事な事なので三段活用しました。後悔も反省もしない。早く3次元のロビンに会いたい！たぶん凄いよ！！そりゃ凄いよ！！何処がとは言わない。俺の6年間にかけて必ず墮とす！！……暴走はこれくらいにしておこう。

まあロビンと愉快的仲間たち（麦わらの一味）に入る事が出来れば俺の夢は安泰だろう。しかし、あの一味についていくには半端な覚悟ではだめだ！！よしっ幸い原作が開始してルフィがここにやってくるのは約17年後、今から鍛えてあいつらを待とう。俺は下準備は入念にするタイプなんだ。「六式」会得を最低目標にできれば「

「覇気」も身につけたい。

「よーしっ！！待ってる珍獣ども！！」

（Side ガイモン）

とんでもない事になっちまった。地面に埋まった箱に入ってたのに全く傷んでねエ果物なんていくらなんでも怪しすぎるだろ！！まさか悪魔の実だったとは・・・アレ確か売ったら凄エ金額になったんだよな・・・そういう問題じゃねエだろ！！

俺は最低だこんなに落ち込んでるタクミに謝るか慰めてやるしかできねエ。でもやっぱりこの姿はちよつと恐エなと思っていたらタクミはちよつとだけこっちを見てから苦しそうな顔をして元の姿に戻った。どこまで優しいんだこいつは！！

俺は傍にいてやることも出来なくなって少し離れたところでタクミの様子を見守った。暫くすると表情をいろいろ変えながらタクミはうろつろしだしたきつと悪魔の力を押さえつけるのに必死なんだ。俺のために・・・タクミが何かを叫んだ声ではつと我に返るとタクミは足をもつれさせて何度も転んでいた。

きつと身体をまともに動かすのも辛いのだろう。俺は誓った・・・タクミがこの島を出れるときが来るまで、俺は何があってもタクミの傍にいる！俺はお前の事も守るんだ！！

Side Out

「「剃」って……やっぱりいきなりは無理か、地面を何度も蹴って急加速ブルーノが言った通りにやったつもりなのに、「剃」ってえ……」

ガイモンがこっちを見てる。あんまりかっこ悪いところ見られたくないし、もうちょい練習して出来なかつたら基礎体力からつけ直そ！！

銀髪の獅子（後書き）

ガイモンはいいヤツだ。

あれから18年（前書き）

修行時代はとばします。主人公とガイモンさんじゃ無理です。絶対に面白くない。

投稿を始めたばかりなのにお気に入り登録が4件もあってとても嬉しかったです。もらった評価はやはり厳しかったんですが・・・

びびびし指導しちゃって下さい。

あれから18年

「みなさんお久しぶりです。藍沢 匠です」

・・・はあ俺は誰に向かって喋ってんだろ？麦わらの一味に加入すると勝手に決めてから18年経ちました。おかしくね？俺はガイモンさんにしか関わってないはずなんだから原作が崩れる事は無いはず。ということは原作でのガイモンさんの20年発言は約20年という事だったらしく俺は去年1年間無駄に心を躍らせ続けた。こんなことなら修行を全力で続ければよかった。

修行の結果を上げると俺の「六式」はほぼ完成した。身体作りに10年かけたかいも有り「剃」「月歩」「嵐脚」「指銃」は問題無いけど「紙絵」「鉄塊」に関しては性能のテストに限界があった。

まず「紙絵」。これはこの島で俺を除いての最速はガイモンさんのピストル。これが問題だった。この世界にはピストルよりも早い攻撃をする人間がいくらでもいる。ピストルの弾を避けられる人間もいくらでもいる。正直メチャクチャな世界だと思いが俺もこの世界で生きていく以上「紙絵」は覚えたい。俺は痛いのは嫌だ！

次に「鉄塊」。これも最初はガイモンさんのピストルで特訓しようとしたのだが「紙絵」の後に特訓を開始したのがまずかった。ビビりな俺は反射的に「紙絵」でかわした。・・・なんかごめんなさいでも理論はなんとなく解ってる。身体を鉄の高度に高める。正直これは筋肉どうこうもあるが「生命帰還」の技術も入ってると思う。だって斬撃で皮膚が切れないんだから、皮膚も操るんでしょ？皮膚

を操る感覚ってどうか、操れてるのかよく解らんから髪をまずは操
つてみた。・・・5年かかった(泣)「鉄塊」ってこんな複雑か？
たぶん修行法を間違えたんだろう。それかセンスの問題？とにかく
人獣形態の「鬣鉄塊^{たてがみ}」でピストルを防げることを確認した後、身体
の各部でピストルを受けきることも成功した。ちなみに全身に「
鉄塊」かけて動くのは無理だった。ジャブラは本当に凄い！！まあ
これも想定外の威力は当然あるから徐々に実験していききたい。

まあ「六式」の前4つは失敗してもこちらにたいした損害が出ない
ので完成としているだけで、まだまだ上を目指すつもりだ。ちなみ
に一番とくいなのは「嵐脚」！！いづれ披露したいねえ！！

あ！「覇気」は普通に無理！！理論も何も訊いてないし。どんな修
行をしていいかすら解らなかった。

「月歩」で海を涉ろうのコーナーも実施されておりません。ライオ
ンらしく持久力は皆無なように跳んでいられる時間は精々10分ほ
どだね！応用技の「剃刀」ともなると1分持たないしね・・・そん
なこんなで最近「生命帰還」と「剃刀」の修行に集中。

スリムな人獣形態を維持しながら「剃刀」で島の外周を高速パト口
ール。万が一、主人公一行が通り過ぎようとしたら無理やりにも
船に乗り込む！！見た目はすっかりダンテ！髪は「生命帰還」に使
いやすいように伸ばしてます。某ハンター漫画の「円」みたいなこ
とができますよ。近距離に死角はありません。

そういえばガイモンさんはここ数年畑を始めて隠居生活。森の番人
に俺が加わるようになって海賊も密猟者も激減したね。そのせいで
銃の調達にちょっと苦労したりもした。最近料理も出来るように

なって晩飯はガイモンさん担当。16ぐらいから食後にガイモンさん特性の濁酒みたいなので晩酌している。

そんな今日この頃。

パトロール兼修行を中断し、浜辺で休憩をしていたら、

「なおつたー！ー！つ！！！」

沖合いから微かに声が聞こえた！

来た！！ナミに警戒されたら困るので双眼鏡を持つ前に森の入り口付近に身を潜めて様子を伺う。

二隻の船は真っ直ぐにこちらに向かってくる！

俺の胸は高鳴る！！ついに会えるんだ、俺の仲間！！未来の海賊王に！！！！

あれから18年（後書き）

ここまで難産だった・・・次回からは一味との絡みが始まるので会話もやや増えるでしょう。

麦わらの一味”ハンター”アイザワ・タクミ(前書き)

一味に合流します。

麦わらの一味”ハンター”アイザワ・タクミ

Side ルフィ

「孤島に着いたぞ………何もねエ島だなア………森だけか？」

「だから言ったのに無人島だって。仲間探すのにこんなところ来てどうすんのよ」

島の感想を言ったらナミのヤツ軽く呆れてらア。でもなんとなくいえると思うんだけどなア新しい仲間………それもとびつきり頼りになるヤツが………

そしたら森の向こうから銀色の鬘をたなびかせて、でっけエライオンが歩いてきた………本能で解る………あいつはバギーんとこのライオンとは違エ………

Side Out

出来る限り威厳を見せながら、俺は獣形態でルフィたちの前に姿を現す。それと同時にルフィの鋭い視線がこちらへと向けられる・・・あれ??ルフィなら面白がって「あのライオンを仲間にする!!」とか言うのかと思っただけでなんか警戒されてる??

「ルフィ!!ライオンよ!!なんでこんな所に居るのかしら??珍しい色だし捕まえたら高く売れるんじゃない?」

ナミ・・・そりゃないだろ(泣)ここまで金の亡者だったとは、いや冗談だと信じたい。そんな事を考えているとルフィが静かに口を開いた。

「お前・・・強えエな。なんとなく解る。」

・・・???なに??このルフィのテンション?予定と違うんだけど?このままじゃ仲間を守る為に決闘だとか言い出しかねないし、人形態に戻って話をしよう。

「君も強そうだね。この獅子の姿を前にして逃げるでもなく、構えるでもなくただ認めるヤツなんて初めてだ」

「・・・っ!!!?」

突然人の姿になった俺にナミは息を呑む。

「驚かせてしまってますまないね。俺はアイザワ・タクミ、ネコネコの実を食べたライオン人間だ。今はこの森の番人をやらせてもらってるよ」

「ネコネコの実のライオン人間ってアンタも悪魔の実の能力者な訳！？」

「そうだね、動物系悪魔の実を食べた人間はその動物の力を取り込む事ができるんだ」

「あいかわらずメチャクチャだわ！悪魔の実って！まあいいわ所で森の番人って？」

ナミは俺の存在をそういうもんだと割り切ったようだ。適応能力高いな！

「ああ、この森にはたくさんの珍獣が生息していてね、珍獣狙いの密猟者が後を絶たないんだ。だから俺がああ姿で追い払ってるって訳さ」

「なるほどね」

「・・・そいつらが逃げねエ時はどうすんだ？」

ナミの疑問が解消されると先ほどまで黙っていたルフィが聞いてきた。

「もちろん力尽くでお帰りいただいでるよ？」

「ははっ！そっか。やっぱお前エ強えんだな！」

今度は間を置かずにルフィは答えた。

「それなりに鍛えてはいるよ。俺には夢があるからね」

「夢??？」

「ああ生まれる前から決めていた夢さ！！この世界には俺の知らない生き物がこの島の珍獣の何千倍っているんだ！！いつか信頼できる仲間と共に、俺は世界を巡って自分だけの生物図鑑を作る！！」

「・・・お前の夢、俺の船で叶えねえか？」

「!?!?・・・お前の事を俺は何にも知らないぞ?そんなおま「俺はモンキー・D・ルフィ!!海賊王になる男だ!!!!いいから俺の仲間になれ!!!!」っ!?!?」

「・・・そうかい・・・よろしく!船長!!!!」^{キャプテン}ハンター”ア
イザワ・タクミ!これより一味のご厄介になる」

Departure (前書き)

HY好きなんです。

お気に入りか11件に、本当にうれしいです。今日はいけるとごま
でいきます。

Departure

ニヤリッ・・・計画どおり!!!

いやあ焦った!! うまい事仲間になれたよ。やっぱりね、ルフィは守るための強さ! 夢のための強さ! この二つを認めると思ったんだよね! 警戒された時は本当にどうしようかと思っただけど、まあ何とかうまくいったね。

今はお世話になった人に挨拶に行くと言う俺にルフィとナミがついてきてガイモンと四人で馬鹿話をしている。俺がこの島にとどまるわけになった。ガイモンの悪戯の話をしていると

「タクミは珍獣のおっさんも守ってたんだな!!」

「ブツころすぞ!!」

というやり取りもあった。でもその後、別れの挨拶をする時はルフィは笑ってた。ナミも笑ってた。

俺とガイモンは・・・やっぱり笑ってた。漫画で読んでたときにはガイモンのことなんか表紙連載で樽娘と一緒に出てくるまですっかり忘れてた。でも今はガイモンのことを本当の親父だと思ってる。

名前も覚えてない元の世界の親父、名前どころか顔も覚えてないこの世界の親父、生きてんのかなあ? 何となく二人とも生きてる気が

する。でも、俺の親父はガイモン。これまでも、これらも。だから、さよならは言わない弁当もって浜辺に出かけるときみたい
に振り向かないで、でもいつもより心を込めて、

「ガイモン……いっできます」

「ああ……いっでこい、タクミ」

……またね……親父。

Side ガイモン

いつもなら昼の休憩が終わってまた訓練でも始めてる時間なのにタクミが畑にやってきた。後ろからついてくる二人を見てとうとうこの時が来たのだという事を悟った。

タクミが世話になった人に挨拶をしたいなんて殊勝な事を言ってきたやがったかと思えば人のことを珍獣呼ばわりしやがって、ふざけた船長の船をタクミはえらんだもんだ。おまけにタクミまで腹抱えて笑ってやがる。ライオンとのあいの子みてエなタクミのほうがよくばど珍獣だ。まあ、あれは俺のせいだ、それなのにタクミは俺を攻めなかったそれどころか俺と今まで一緒に居てくれた。

侵入者対策の罾の位置を注意したり、薬草の煎じ方なんかを紙に書いていたものを渡してくれたりと最後まで俺の世話を焼こうとしていたが伝える事がなくなったのか笑顔のまま歩き出す。

だから俺も笑顔を返す。タクミは毎朝浜辺に出かけるときみたいに自然に振り向きもしないで俺に手を振る。

「ガイモン………いつできます」

「ああ………いつでいい、タクミ」

……泣いてんじゃねえ……馬鹿息子。

Side
Outs

Departure (後書き)

主人公はガイモンの元でいい子ちゃんに育てなおされました。ガイモンから離れ偶には腹黒くなるかもしれませんが。

ナミとソロと俺と（前書き）

珍獣島でずっと寝ていた漢との初対面です。

ナミとソロと俺と

ガイモンと森の中で別れ、俺は食料が無いと言うルフィの為に果物を山ほど積んでやった。・・・ナミの船に。単純な話だ、ルフィの船に積んだら沈む。

「果物だけか？肉ねエのかくくくく」

困ったヤツだ俺がこの島の動物たちを守ってきたってこと忘れてんじゃないのか？

「魚でよければ後で売れるほど釣ってやる。この島で肉が喰いたいなら俺を倒せ！！」

「・・・！？おつ俺が言いたかったのは魚肉だ魚肉！！お前と珍獣のおっさんが守ってきた島だって忘れてたわけじゃねエぞ！！・・・ほっ本当だぞ！！！！」

「嘘へたっ！！」

果物を積み終わってルフィの船に向かおうとすると

「ちょっと待って。あんたはこっち！」

ナミに呼び止められた。

「どうしたんだ？俺が居ないと寂しいのかい？」

「・・・アンタそんなキャラだったっけ？まあいいわ、そっちの船にアンタみたいなライオンが乗ってたら船は沈むわよ。あたしの船のほうがいくらかまじだから、あんたはこっちに乗りなさい！」

「わかったよ」

俺はナミの船の出港を手伝う。ルフィの小船のほうではゾロがまだ寝てる。カバジとの戦闘で負ったはずの傷は大丈夫なんだろうか？少しだけ心配しながら俺たちの2隻は珍獣島を後にする。

出航して暫くして俺は航海が安定しているのを確認して、

「ところでお嬢さんのお名前は？まだ聞かせてもらってなかったと思っただけど？」

「あら、そうねなんかいつの間にか溶け込んでたから。わたしはナミ今はそうね、雇われ航海士って所かしら？よろしくねライオンのタクミ」

「ライオンのって……まあいいやナミは一味の仲間じゃないのか？」

「手を組んでるだけよ！わたしは海賊が嫌いなよ！」

「あんなに楽しそうに笑ってて説得力無いな」

「……っ！？うるさいわねエー！」

ナミは若干照れてるようだ（笑）あんまりからかつのはよくないの
で「機嫌をとろつ」としている

「くああ……よく寝た。　　てめエは誰だ？」

「ようやく起きたのか？手負いの獣君。俺はアイザワ・タクミ。この一味に加わる事になった。よろしくな！腹、怪我してるんだろ？診てやるつか？」

「・・・俺はロロノア・ゾロだ。この程度の怪我は何でもねえ！お前は医者か？そうは見えねえが」

「俺はハンターだ！生物を調査・捕獲・保護するのが目的だな。いろんな場所に行く都合でサバイバル技術として医術と料理は少し齧ってるんだよ。治療がいらならこの良治の水はどうだ？次の目的地までひまなんだろ？、付き合ってくれよ」

ゾロにはこれだ！！ガイモン特製の濁酒を掲げるとゾロは笑みを浮かべる

「いいねえ俺も退屈してたところだ。この船じゃ身体も碌に鍛えらんねえからな」

「見たことないお酒ね！わたしもつきあうわよ？」

「俺の親父の自慢の酒さね！たっぷり積んだんだ！さあ呑もう！！」

それから数時間、三人からこれまでの航海のことを聞きながら呑んだ。ゾロは酒を飲むときはそれなりに陽気になるようだしナミも楽しそうだ。いい飲み友になれそうだ。

Side ソロ

初めてコイツを眼にした時は久々に血が騒いだ。カバジとかいう曲芸野郎なんかと戦ったが何の収穫にもならなかった。剣士としての
はるか高み、その頂点、大剣豪。俺はくいなに誓ったんだ！俺が警戒しながら声をかけたのにコイツは俺の事を手負いの獣なんてから
かったかと思えば、名を名乗りそして一味に加わったのだと俺に告
げ、治療を提案してきた。

俺も名を名乗り、治療は拒否する。正直コイツは医者には見えねえ
！刀を持つてる風でもねえのにコイツからは剣士のような獣のよう
な威圧感を感じる。だが見た目は隙だらけ。俺が困惑しているとち
よっと苦笑いしながら

「俺はハンターだ！生物を調査・捕獲・保護するのが目的だな。い
ろんな場所に行く都合でサバイバル技術として医術と料理は少し齧
ってるんだよ。治療がいらならこの良治の水はどうだ？次の目
的地までひまなんだろ？、付き合ってくれよ」

なんとなく解ったコイツは警戒を解くために隙をみせ、同じ酒を飲
み交わすことで仲間になろうとしているんだ俺も警戒を解いたフリ
をして

「いいねえ俺も退屈してたところだ。この船じゃ身体も碌に鍛えら
んねえからな」

言外に鍛錬の代わりであると伝える。コイツは鈍そうな風でもねエのに俺の言葉を素直に受け取った様に親父の自慢の酒とやらを出してきた。たいした役者だ。

ナミも交えて酒を酌み交わしはじめてどれくらい経っただろう。当初の俺の疑念は霧散し、今は俺もここから酒を楽しんでいる。様々な言葉を交わしたがタクミの言葉には嘘も裏も無い。眼を見りゃ解る。話を聞くにこいつから放たれる威圧感や悪魔の気配とタクミが習得している武術にあるようだ。凶暴性を高める悪魔の力の力をタクミは精神力で押さえ込んでいるらしい。夢のため、タクミは鋼の精神を持っているのだろう。タクミの夢なら少しぐらい手伝ってやってもいい、仲間にいる方が面白そうだ。

でも1回くらい戦ってみてエな・・・酔った振りして1回くらい駄目かな？

Side ルフィ

俺は酒を飲まねエから肴の干物をずっと齧りながら時々話に参加した。三人は楽しそうに酒を飲みながら以前からの仲間のように打ち解けている。それはいい・・・でもよ

「タクミ・・・・・・・・魚肉は？」

Side
Out

「あっ!?!」

ナミとソロと俺と（後書き）

このあとは暫く魚釣りタイムでしょうね。

ナミの気持ち（前書き）

評価5をくれたどこかのアナタ！！感想を！！感想を下さい！！！！
！めっちゃ嬉しかったデス！！！！

ナミの気持ち

穏やかな波の上を1隻の舟は漂う。

「タクミ・・・なんか雰囲気悪いんだけど、どうにかならないの？」

「・・・酒」

はいっ只今の俺はメチャクチャ不機嫌です！！何故かって？それはガイモンブランドの濁酒が僅か3日で無くなったから・・・ありえねえ・・・まあね、3人で楽しく呑んだんなら俺だって納得だよ！？でも犯人は単独犯！！

俺の視線をこの2日間一手に引きつけるこの男！麦わらのルフィ！毎日酒盛りしている俺たちが羨ましかったのかルフィは俺たちが寝静まった真夜中こっそり濁酒を呑みそして暴れた。それをみてさすがに俺も頭にきたがルフィには効かない拳骨でその怒りを若干発散し、爆発寸前だった俺をゾロが何か諫めた。

まあ俺も悪いんだけどね。ルフィが酒に強い描写がなかったから、なんとなく危険を感じ、3日目に酒と肴の美味さを語る俺に自分も飲みたいと言いだしたとき、適当なことを言っただけだった。あのとき飲ませておけば暴れだしても何とか止められただろうに。予想通り酒に弱くさらには極度の酒乱であったルフィは暴れて酒樽と舟一隻を大破させた。

でもそんなことでは納得いかにくいじている俺に対して、我慢できないナミは珍獣島に一度引き返す事を提案したぐらいだ。俺もいったん了承しかけたがあれだけ仰々しく別れを告げたにも関わらず1週間で帰郷するのはさすがに気まずいので断った。

このままグランドラインへと向かうには装備（船）と準備（酒）が不足しているというナミの意見に従い舟は一路シロップ村を目指す。

「Side ナミ」

「はあ」

わたしは今日何度目か解らない溜め息をつく、ルフィは「肉」以外の単語を知らないみたいだし、ゾロはだいたい昼寝をしている。何より溜め息の原因はタクミ、2日前夜中に物音がしたので起きてみれば、割れた酒樽の近くで暴れているルフィとそれを見て固まっているタクミ。あのお酒はガイモンさんが作ったお洒らしくタクミに取っては大切なもの。きつと飲み終わっても樽は取っておくつもりだっただろう。

タクミの性格上、怒り狂うことは無くても悲しんでいるはずだ。せめて慰めてあげようと1歩足を進めるとタクミが目の前から消え轟音と共にルフィが床にめり込んでいた。起き上がり尚も暴れようとするルフィを捕まえゾロが眠っている舟の方向に思いっきり投げつけた。

舟は大破し海に浸かってもう暴れなくなったルフィを抱えてゾロがこちらの舟にやってきた。ゾロに文句を言われてタクミは段々と落ち着いていったようだ。が今のはなんだったんだろう。本当に消えたように見えた、タクミならもしかしてアーロンに勝てるかも？と一瞬考えたが慌てて首を振る。

イストブル
東の海にアーロンに勝てる海賊も海兵もない！そんなのはココヤシ村では常識だ！村はわたしが守る。

翌日のタクミはいつも通りの態度ではあったが雰囲気が違う。ルフィは酔っていた間の記憶がすっかり無くなっているようで

「何か酔っ払って迷惑かけたらしいな！！ごめん！！」

とノリは軽いが謝っていたのでタクミは赦したのだろうが・・・ダメだ！！この雰囲気にはわたしが耐えられない。タクミにはいつものように笑っていて欲しいから一度引き返そうかと提案したが寂しそくに断られた。この間の事を恐がっていると思われたのだろうか？

そんな事は別に無いタクミは優しいし気を使う事ができる人間だ。ルフィがゴムだから殴って止められないと思つてゾロのいる海に投げたのだろう事は解つてる。まあ加減と方向を若干間違えたようだったけど。誤解を解こうかと思つたけど止めた何を考えているんだろういずれ裏切る事になるタクミにどう思われたって関係ない！

でも近づいているであろう別れを想つとちょっとだけ寂しくなる。ちゃんと裏切る事ができるのかなこいつらしいヤツだもんなあ・・・

とりあえず物資補給の為、まあ落ち込んでいるタクミの為に酒を
買ってあげたいという気持ち強いのだが、南のシロップ村に立ち
寄る事にする。

残り少ない航海をわたしは出来るだけ楽しもうと思つ。

＼Side
ルフィ＼

「肉を食つぞ！！！」

＼Side
Out＼

ナミの気持ち（後書き）

何かルフィがネタキャラになってる。

キャアプテ~~~~ン・ウソップ!!!(笑)(前書き)

ウソップ好きなんですよね。この小説のウソップはかなりはっちゃける予定です。

キャアプテ~~~~ン・ウソップ!!! (笑)

「あつたなー！本当に大陸が！」

「なに言ってるの？ナミは優秀な航海士だよ？」

「はいはい。褒めてもお酒ぐらいしか買ってあげないわよ」

「ナミ……流石だな」

すかさずキリツと顔を作ってナミを讃える言葉をかけるゾロ、そんなに酒が飲みたいのか？

「タクミに買うのよ？欲しければわたしを讃え敬いつつ、タクミに配給を願いなさい」

芝居がかった調子でそう告げるナミはノリノリだった。

「タクミ……何か扱いが違くないか？」

「仕方ないんじゃない？この舟では今、俺が代理コックみたいなんだから。海の上でコックに逆らったらデスるかもよ？求めよ！それど渡さん！！・・・みたいな（笑）」

「お前・・・性格悪くなってきたねエか？」

ゾロがジト目で睨んでくる

「親離れしたから？それよりナミがお酒買ってきてくれるみたいだし、久しぶりに昼間から呑まない？」

「・・・そつだなじゃあ行くか」

ゾロは納得していないようだが取り敢えず舟から降り、地面が久しぶりとかボヤキながら伸びをしている。性格は元から悪い方だと思う、昔は同僚から腹黒王子と呼ばれていた。褒め言葉として受け取った上で一発殴つといたのは言うまでも無い。後、ルフィに壊された酒樽のことで未だにいじけているのは否定はしない。

「あいつら何だ？」

ゾロの言葉で我に返ると崖の上にはウソップ海賊団の面々、俺、ウソップは結構好きなんだよね

「「うわあああ見つかったア~~~~~」~~~~~」~~~~~つ！
！」「」

子供たちは一様に逃げだした。俺がゆつくりと舟から降りてくる間にウソップもこちらに下りてきて俺たち四人を見据えて口上を述べる。にしても鼻長いな~~~~~！！

Side ウソップ

やべえ、やべえ、やべえ、やべえ、やべえ、やべえ、やべえ、やべえ、
え、やべえ、やべえ、やべえ、やべえ、やべえ、やべえ、やべえ、
やべえ、やべえ、やべえ、やべえ、やべえ、やべえ、やべえ、やべえ、
え、やべえ、やべえ、やべえ、やべえ、やべえ、やべえ、やべえ、
やべえ、やべえ、やべえ、やべえ、やべえ、やべえ、やべえ、

まじでやべえ、今、俺の前にはあの”懸賞金千五百万 道化のバギー”の一味のクルーが四人いる。小型船一隻に船員四人と聞いてやってきたが女はともかくこの男三人はやべえ！！なんかオーラみたいなのが視える気がするし、後から降りてきた銀髪はやけにニヤニヤしながら俺を見てるなんか特に鼻を見てる、いや凝視してる。

・・・はっ！！まさかコイツ「新種発見！！！！鼻長族か？売ればいい値がつきそうだぜ！！」みたいなことを考えているんじゃない？マ

ズイ！！ここはやはり得意のハツタリで切り抜けるしかねエ！！！

「おれはこの村に君臨する大海賊団を率いるウソップ！！！人びら
うそでしょ」ゲツ！！ばれた！！」

「そんなことはどうでもいいから、わたし達は略奪しに来たんじや
ないんだから。取り敢えず食事が出来るところに案内してくれるか
しら？」

オレンジ髪の女が俺の嘘口上を途中で見破った！！！！この女もや
はり警戒しておくべきだったのか。おのれ策士め！！！幸い村を襲
いに来たわけでは無いようだし素直に案内でもするか。・・・待
てよあの女即座に俺の嘘を見破ったって事は、俺の上に行く嘘吐き
のプロ！！！！嘘の伝道者で『唯一絶対究極嘘吐き神』に違いねエ！
！！

危うく騙されるところだった！よし、このまま森の中に設置してあ
るウソップ海賊団の究極の落とし穴に落とし穴としてやろう

「なぐんだ！！それならそうと早く言えよ！よし俺がこの村1番の
飯屋に案内してやるよ！！」

「はっはっはっはっは、おつまえ面白エなーーーー！！！！一人で
何個の顔ができた??？」

キャアプテ~~~~ン・ウソップ!!!(笑)(後書き)

いかがですか、うちのウソップはハンパないネガツ鼻です。

感想・評価をお待ちしております!

ナニ早期救済を目指して（前書き）

原作読んでて疑問に思ったことを解決させて貰います。

両方の評価に5をつけてくれた人が5人もいるみたいです。

なに？俺を泣かせたいの？できれば感想を書いて欲しいです。お礼を言いたいので。

「どうもありがと〜〜！！！」オカザイル面白かったです。

ナミ早期救済を目指して

復活したウソップに1番話を通じそうだったゾロから説明をさせ誤解は解けたっぽい？そんなウソップにつれられて（もちろんちゃん到着替えに帰らせました）やってきた村1番の飯屋でただいま会食中ですよ。ナミはウソップからカヤさんの事とかいろいろ聞いてるみたいだけど俺はゾロと二人で地酒の飲み比べ。気に入った酒をナミにメリー号いっぱい買ってもらおうつもりなんだよね

ちなみにルフィはどちらにも興味が無いようで肉に夢中。まあ俺らの方に加わるうものなら問答無用で叩き出すが、せめてメリー号が関連するナミとウソップの会話には加わろうよ。

「タクミはシャンパンが好きなのか？でもそいつは樽では買えねエからあんまり量は積みねエんじゃねエか？」

黙って飲んでいたゾロに不意に話しかけられ素で応える

「いいんだよこれはここで呑むだけで、『シャンパン以外は呑みたくない』とか上客に言ってた新人時代を思い出すんだ」

「・・・何の新人だよ・・・ってそれは夜の店のことだよなア！？お前7歳からあの島に居たんだろ？しかもそれ以前の記憶は無いって・・・どういうことだ？」

「えっ!?!?.....」冗談だよ?」

ゾロはニヤニヤしながら追撃してくる

「今、一瞬慌ててただろ?白状しろよ」

「ジヨ~~~~~ダンじゃな~~~~~いわよ~~~~~
う!?!?!」

「オカマバー~~~~!?!?!.....流石にそれは冗談だろう。話し
たくねエなら別にいい。」

「いめんねえ」

「.....なんかもう普通の口調がオカマっぽく聞こえてきやがった。
もうこの話題には触れねエことにする」

そう言ってゾロは飲み比べを再開する。.....いやあ危なかったあ
流石に原作主要キャラに転生者をカミングアウトするわけにはいか
ないもんねえ。うまいこと誤魔化すことに成功したようだ。ありが
とうベンサム!!

ていうかこっちにもあるんだ、ホストクラブとかオカマバーとか。ゾロがそんなの知ってたのも驚いたが、・・・酒好きだから？

そんな寸劇を終えて俺も飲み比べを再開していると

「おまえら・・・おれが船長キャプテンになってやってもいいぜ!!!!」

と話の流れは知らんがウソップが言ってきたので

「「「「「めんなさい」「」「」

「はえエな おい!!」

アイコンタクトも無く俺たちは華麗なユニゾンアタックをかました。

あの後、お野菜三人組とも寸劇をこなして、ルフィ、ゾロ、ナミの三人はカヤの屋敷へ直接交渉に向かった。

俺は何をしているかという原作者で気になっていた事を思い出したので一人、別行動を取っている。気になる点はある”百計のクロ”

何の報いも受けていないことだ。ルフィは相手を殺さずに決着をつけるがそれは甘い！クロは戦闘後、ジャンゴの抜けたクロネコ海賊団に復帰し、海賊を続けている。これを何とかできないだろうか？

俺には策がある。しかもそれはナミの精神的早期救済になるのだ。俺は交渉のシュミレーションを終え、村の駐在所の電伝虫を手にする。

「……こちら海軍第16支部」

「はじめまして、俺は賞金稼ぎのタクミっていう者です。重要な話をお伝えしたいので、ネズミ大佐にお繋ぎ願えますか？大佐の出世に関わるお話だとお伝え下さい」

「なんだ貴様！？そんなふざけた電話を繋げるわけ無いだろう！！」

「あれ？いいんですか？大佐はその支部長でしょ？大佐の利益になることを伝えなかつたら後でどうなっても知りませんよ？おそらく今日の電話対応者全員がまとめて処分されます。後日そちらに伺う予定もありますしね」

「……わ、わかった。くれぐれもわたしが最初に渋ったということは大佐に話さないでくれ」

「了解しました」

よっしゃあ食いついた！第1段階クリア！！やっぱりね、この支部も腐ってる。東の海のダメ支部はシエルズタウンのモーガンがいな
い以上ここしか知らないから。断られたらどうしようか焦ったよ

「・・・わたしが第16支部大佐のネズミだ。有益な情報っていうのは本当だろうか？」

「もちろんですよ、大佐殿。大佐は”百計のクロ”をご存知ですか？」

「無論知っている。我々海軍が捉え3年前に処刑した」

「聡明ですね、でもこれはご存じないでしょう・・・クロは生きています」

「！！！！何っ！？それは本当か？」

「確かな情報で潜伏先も突き止め、しかもわたしにはクロを倒す術がある・・・大佐・・・海軍を欺き逃亡したクロを捕

らえたという手柄、欲しくはありませんか？大佐が別ルートで換金しても構いませんよ？」

「……チチチチ……そういうことが、で、いくら欲しいのかね
賞金稼ぎくん」

「話が早くて助かりますね……そうですね、当時の懸賞金が千六百万ベリー、海軍船全滅プラス海軍に対する偽装工作、さらに現クロネコ海賊団幹部ブチとシヤムをお付けして何とたったの一千万ベリー……いかかでしょうか？」

「チチチチ……破格だな。君は実に世渡りがうまい……いいだろうその話のろうじやないか」

「ありがとうございます 低価格設定なので、ついでに小さなお願いいしてもよろしいですか？」

「言ってみたまえ」

「受け渡し場所はシロップ村、そこまで迎えに来ていただいた後、その場で賞金を受け取り海上レストラン『バラティエ』まで送っていただきたいんですけど」

「かまわんよ。そのかわり今後君が捕らえた賞金首はすべてわたしを仲介に通して換金してもらおう。それとクローは決して殺さずに無力化するんだ」

「了解しました。いつ頃こちらに到着しますか？」

「海軍船で全速3日といったところだろう」

「それなら大丈夫です。では3日後の夕刻シロップ村南の海岸で」

「楽しみにしてるよ賞金稼ぎくん・・・では」

ガチャ・・・

完璧だ（笑）大成功！！！ネズミなら絶対乗ってくると思った。海軍船ならバラティエでのクローク戦に合うだろ。賞金首になつていない今だからこそ使える悪魔的奇手！！ナミの一億ベリーは原作あと七百万ベリーって言ってたからどれだけ酒買っても一千万ベリー足せば足りるだろうね。アーロンは約束は守る、ナミはそう信じているからそれだけで救われるだろう。まあどっちにしろアーロンパークは潰すしね。アーロンがすんなりお金を受け取っても後から奪還します。

悪巧みもすんだことだし、あすの戦いに備えて呑み直しますか

ナニ早期救済を目指して（後書き）

タクミ真っ黒です。

ウソップの決意（前書き）

すみません。ここはあんまりいじりたくなかったんですが・・・

ウソップの決意

ゾロと飲み直そうと思ったんだけど見当たらないから南の海岸で一人酒の真っ最中です。

「タクミ！？アンタこんな所に居たの」

「あ、ナミ、買ってもらうお酒はこれがいいかな、10樽位買っておいてね」

「そんなに載るわけ無いでしょうが！！」

「がつんっ！！殴らなくてもイイのに」

「痛いよ！！、お嬢様に船貰うんじゃないのよ！！」

「今、そんな状況じゃないのよ！！」

「ん？？どうした？そういえば長鼻くんが元気ないみたいだけど」

ナミが深刻そうな顔で話し始める

「この村が明日襲われるのよ……クロネコ海賊団って海賊にね。この海岸から進攻してくるって情報を事前に掴めたのは幸いだっただけど問題は首謀者が村人からの信頼も厚いクラハドルっていう執事ってことなのよ」

「何か問題がある？上陸地点が解ってるんなら船寄せる前に殲滅すれば？その執事の事だっって実際に計画を話してるのを見たし聞いたっって言えば問題無いと思うけど？」

「殲滅ってそんな事……出来そうね、タクミなら。でも住人の避難は難しいわ」

「なんで？」

ウソップが絞り出すような声で語りだす

「……あの執事が話してるのを聞いたのはお前んとこの船長とおれなんだ。コイツはよそ者だから問題外だし、……おれは嘔吐きだからよ、信じて貰えずにこのザマだ」

銃創がある左腕を押さえながらウソップが俯いている

「腕に銃弾ブチ込まれようともよ・・・ホウキ持って追っかけ回されようともよ・・・ここはおれの育った村だ!!おれはこの村が大好きだ!!みんなを守りたい・・・!!!!こんなわけもわからねえうちに・・・みんなを殺されてたまるかよ!!!」

涙を押さえ込んで立ち上がるウソップを俺は真っ直ぐに見据える

「だからおれはこの海岸で海賊どもを迎え撃ち!!この一件を嘘にする!!!!!それが嘘吐きとして!!!おれの通すべき筋つてもんだ!!!!!!」

やっぱりウソップはキメるときはキメるねえ!かつこいいよ!でもまあ嘘は良くないね、戦闘時以外ではあんまり嘘吐かないほうがイイと思うよ。ちよっと自業自得な感じもするけどなかなかの心意気を見せて貰ったし、俺も助けましょうか。

「ルフィ?俺は助けてあげたいんだけど、どうする?上陸地点はここなんだろ?俺なら近づいた瞬間に船ごと殲滅できると思うし」

「ああ、でもおれ達も加勢「言っとくけど宝は全部わたしの物よ!」
・・・するぞ」

Side ウソップ

こいつら馬鹿なのか？相手はクロネコ海賊団、C・クロの賞金は確か一千六百万ベリ！。俺は決死の覚悟で狡い手を（矛盾してない！）使うつもりだったのに、銀髪は無茶苦茶な殲滅計画を次々と発表し船長は面白くないからと却下しまくる。

こいつらには緊張感の欠片も無い結局おれ一人で戦うようなもんだ。決戦を想像し足が震える。毬藻頭がこつちを黙ってみてやる。

「見世物じゃねエぞ！！怖エもんは怖エんだ！！ふざけた計画立てて馬鹿にしてんなら帰れ！」

「笑ってやしねエだろ？立派だと思っからおれは手を貸すんだ！だいたいタクミの計画はおそらく全部実現可能な計画だと思うぞ？」

はい？？？銀髪の計画って遠距離から大岩ブン投げるとか、船まで跳んでいって単純に蹂躪するとか聞いて損したって言うような計画ばかりだぞ？それが実現可能？一体何なんだこいつら？

Side Out

どうせ反対側の海岸に上陸すると知ってる俺はふざけた事ばかり提案して遊んでいたらウソップが全員に何が出来るかを聞いてきたので答える

「斬る」「のびる」「狩る」「盗む」「隠れる」

そんなコントをしながら結局おれの遊撃作とウソップの狡い作戦（油坂）の２段構えになった。夜明けと共に攻め入ってくる予定のクロナコ海賊団対策は意味無く完璧！いつまでも船が見えないので流石にみんな不審がってるけどもう北の海岸付近に上陸してるころだろう。一味での初戦闘を前に血が滾ってきた

「なんか北から声が聞こえないか？」

みんなに聞こえそうな音になったあたりでウソップの様子を見ると……立ったまま泡を吹いていた……

……だからどうしてこうなった

ウソップの決意（後書き）

今回はウソップサイドからVSクロネコ海賊団が開戦します。

V S クロネコ海賊団（前書き）

ルフィが空気ですね。

V S クロネコ海賊団

Side ウソップ

自信満々で待ち構えるこいつらにどっか安心していた部分があったのかもしれないエ。船が見えたら銀髪が跳んでつて（飛ぶ では無いらしい）上陸前に片付けるそうだ。瞬殺出来ないような敵が乗っていた場合は即帰還、五人で迎え撃つらしい。

跳んでいく！？この点には銀髪の仲間三人も若干驚いてはいたが「タクミは何でもありね！」とのオレンジ髪の意見でなんか納得していた。この銀髪の実力を早くこの眼で見えてみてエな！そんなことを考えていると朝日が見えてきた。

・・・・・・・・あれ?????

完全な夜明けがきたってエのにクロネコ海賊団の姿は欠片も見あたらねエ！？四人とも不審な顔をしているが銀髪の様子がおかしい。長い髪がざわざわと総毛立ちそれを注視しているといつの間にか顔

が獅子になり肢体も獣のそれに変貌を遂げていた。

「なんか北から声が聞こえないか？」

銀髪の獅子の唸るような言葉を聞きながらおれの意識は途切れたんだ。

Side Out

泡吹いてるウソップを起こそうとして手を伸ばしたらいつの間にか人獣化してた。そりゃあウソップも泡吹くわな(笑)俺は一人納得し、寧ろ話していたはいたが初見で眉ひとつ動かさないゾロに驚いたね。俺のことを仲間だと思ってくれてるからだろう！うれしかった！！

人獣形態での初めての対人戦闘に興奮してたんだろうけど未だに制御が完璧に出来ていないとは情けない・・・はっ！？それより早くウソップ起こさないと！！

Side ウソップ

Side ナミ

「誰が迷子顔だこらア!!!」

「は？おいつ！？なんだ？自分で走るぞ！俺は脚には自信があるんだ——————!!!」

タクミの発言にゾロが憤慨し、ウソップが抗議をしてる途中でタクミはウソップを抱えて風のように消えてしまった。あいかわらずとんでもないスピードね！わたしたちも早く行かなきゃね、北の海岸にはわたしのお宝があるんだから!!!

「北へ真っ直ぐ————!!!」

「ちょっと待ってルフィ!!!そっちは東よ————!!!……ダメだわ早く追いかけな……きゃああ「おいナミ!!!何やってんだ」助けて落ちるっ!!!」

ウソップが撒いていた油に足をとられて滑り落ちそう、でも大丈夫ゾロの服に手が届いたから

「は!?!」

つるん！……べちゃー！！ キラッ

「うわあああつ！！手エ離せバカ！！」「ありがとゾロ！！」「」

だん！「う」 だん！「が」 だん！！「がつ！！」

わたしは犠牲となったゾロに感謝を込めてその背中を三段跳びで駆け上がった！

「のわあ~~~~~」

ゾロはまぬけな叫びをあげながらツルツルと油坂を滑り落ちていった

「わるいつ！宝が危ないの！！」

わたしはルフィを連れ戻すのを諦めて全速力で北の海岸へと向かう。

Side Out

さて北の海岸に着いた今、目の前には呆然とした表情で固まっているクロネコ海賊団の面々、まあ自分たちの進む道の先に突然ライオン人間と長鼻族なんかが見れたら驚くわなあ。ま、動かないならちよつどいいしさくつと潰させてもらおうかクロネコ海賊団！！

Side ウソップ

「俺はあの船長を潰すから、ルフィとゾロが来るまで他の連中の足止めをよろしく頼む！！」

未だに固まっていたおれにそう告げるとタクミはさらに巨大化して駆け出していった。先ほどよりスピードは落ちるようだがあれがタクミの全力の姿なのだろう飛び道具使いの船長の下へ真っ直ぐに本当にまっすぐに進んでいく。進路を阻む者を紙屑のように屠っていく。

おれはその姿に震えていたこれは恐怖じゃなくてたぶん憧れ、これが海賊！！”勇敢なる海の戦士”おれはたぶんあんなに強くはなれないけどそれでもおれは海に出よう！早いほうがいいこの戦いが終わったらすぐにでも！！

そんなことばかり考えていたらおれの頭を味わったことの無いような衝撃が襲った！！？そうだとタクミは敵をすべて倒しながら進んだ

わけじゃないんだおれの力を信じてこの坂道での敵の足止めを任せ
てくれたんだ。それえなのにおれは・・・

「！！！！」

声も出ねエ・・・でも、もう情けなく気絶なんかしないおれの心
はもう”勇敢なる海の戦士”なんだ！！気力だけで身体を動かして
こっそりとパチンコに手をかける

「おい！お前ら早くいくぞ！！あの化け物には船長かニャーバン・
ブラザーズ
兄弟しか勝てない！！俺達はC・クロの計画を狂わせないことだけ
考えてりゃいいんだ！！計画が狂ったらそれこそ殺されつつがあ
は！！！！？」

「へっ！！この坂道・・・たとえ死んでもお前らを通すわけにはい
かねエ！！！！おれはいつも通り嘘を吐いただけだから！！！！・・・
村ではいつも通りの1日が始まるだけなんだから！！！！」

おれはゆっくりと立ち上がる、さあこい！！キャプテン・ウソップ
様の本領はここからだぜ！！！！

「トラっ！！大丈夫かっ！？このクソガキふざけやがって！死ぬエ
！！！！」

今度はカトラス良く手入れされてやがる・・・ははっ、2発目の

発射準備は整ってるんだ狙いは外さない！！気力雄雄しくおれは雄たけびを上げる

「うおおおおお！！！！！！」

・・・っ！！！？立ちくらみ！？・・・やべえ、滑り落ちていくおれのパチンコ、まっすぐに迫ってくるカトラスの突き。

おれの世界はスローモーションだった。。。

VSクロネコ海賊団（後書き）

視点が変わりすぎて読みにくいですね。しかも長い。反省してます。

ウソップをかつこよく書きたかったんです。

シュレーディングアのクロネコたち（前書き）

初めて感想をもらえたのですが酷評でした。

・「ルフィのキャラが変」そうですね。迷走してる自覚がありません。かつこいい台詞を考えてはみるのですがルフィはとくに原作の台詞が強すぎて丸写しになりかねないので、結果ネタキャラ（ていうか空気キャラ）になってますね。何とかしたいと思ってます。

・「主人公の喋り方が気持ち悪い」この意見があまりに多かったので全改稿しました。

感想・評価お待ちしております。

シュレーディングアのクロネコたち

俺は坂道の防衛をウソップに任せ、俺は人獣時に常時展開の「紙絵武身」を解除して坂道を駆け下る。ナミと二人である程度持ちこたえてたんだから俺が数を減らせばまあ大丈夫だろ。

ジャンゴを捕捉して正面突破を試みる。森の番人をしていた頃は獣形態で脅しをかけ引かない場合はそのまま噛み殺していた。だから人獣形態での戦闘は今回が初、「紙絵武身」の性能と一番不安な「紙絵」そのものはクロで試せばいいだろう。それぐらいの相手じゃないとテストにならない。

先頭の男は単独で武器はサーベルなので不安だった「鉄塊」を試してみる

「鉄塊 剛」

キーン！！

「なっ！？髪で受け止め「咬指銃」グボア！？」

余計なことを言わないで欲しいねえ、身体で受け止めるのは怖いもんは怖い。まあこれでこの船の雑魚クラスは「鬣 鉄塊 剛」で受けきれることがわかったし・・・「獅子鉄塊」とかいったほうが様になるだろうか？

「咬指銃」が人に与えるダメージも大体わかった。うん、やりすぎた「指銃」は指に「鉄塊」をかけて高速で打ち抜く技（原作の理論

がどうかは知らないけど)「咬指銃」は5本の指すべての第1関節までに「鉄塊」をかけて打ち込み後は鍛えた握力で力任せに肉を掴み取り取る。アーロンを真似て修行した技。本家とどちらが強いのだろう?結果タマ(仮)のお腹は左から1/3ほどが無くなり鮮血が噴出すってゆうか溢れてる、致命傷だね、綺麗だね、何か叫んでるような気もするけどスルーで!

タマ(仮)君の犠牲はもちろん忘れるけど俺の力の礎になるんだ、そうコイツらは哀れなシュレーディングアのクロネコ。後は原作の「六式」応用技を試すことにするからまあがんばって。

「なっ何なんだお前は・・・ワン・ツー・ジャンぐおぼべば!!!」

「あれ?」

うん、またやりすぎた、珍しく反省はしてる。ダメだ「紙絵武身」を解除しての人獣形態は血を見て湧き上がる凶暴性を抑えきれない。ジャンゴに催眠術をかけられそうになつてとっさに「獣敵」かますまで気づかなかつた。

チョッパーになんとか出来るのか?まあそれまでは単独戦闘時に限定して使用することにするか、何かもう見境無いからな・・・いろいろ試すつもりだったのに接触する前に「嵐脚線」で無力化、進路外から近づいてきた相手には「咬指銃」、クロネコ海賊団にはジャンゴ以外に飛び道具の使い手がないようなのでジャンゴだけを見据えて只進んできたわけだが。

被害は甚大・・・たぶん4人くらいは死んでる。すつ飛んでいったけどジャンゴ死んでないよな？まだ原作に関わってきそうだからネズミに引き渡す約束もなかったし、もちろん殺すつもりも無かった。でもジャンゴは実際怖いだろ？「ワン・ツー・ジャンゴで死にたくなれ」と言われたら即終了。あの催眠術はそれぐらいの強制力がありそうだからな。・・・たぶん生きてるだろ！！なっ！！だってこの世界の人間ってヤツはやたらと打撃には強い！吹っ飛んでもなぜか無事！ワポルとかバギーとかよく生きてたなと感心するよ。よし、ジャンゴは大丈夫のはず。次っ！！

敵を殺しちゃったのは大丈夫かな？なんだかんだで一味は直接殺してないよな？でも、戦いにはみんな覚悟を持って臨んでいるみたいだし、無力化した相手に止めを刺さないと言うだけ・・・まあ大丈夫だろ、みんな1撃で死んでるし。いたぶる様な快樂殺人者には見えないはず。頭に「咬指銃」を受けた船員はかなり酷いことになってるけどスルーで、何かもういろいろスルーで！！もしも何か突っ込まれそうだったらそれっぽい演説でもかまして、うやむやにしておしまおう。

「うおおおおお！！！！」

おっ！勇ましいなウソップ、何人倒したんだ？

.....

「！！？目に映るのは絶体絶命のウソップ！！慌てて地面を強く蹴る！「紙絵武身」にはタイムラグがあるので解除したまま駆け出す

「「剃」！！！」

頼む！！間に合ってくれ！！！！

くSide ナミく

「わたしの宝に手えだしたらゆるさないんだから！！」

北の海岸に向かって森を駆け抜ける。タクミが先行しているので問題無いとは思うけどあれはココヤシ村を救う為の大切なモノ。何かあっても渡すわけにはいかない。もうすぐ海岸だ万が一に備えて武器を用意していこう・・・無事なんでしょうねタクミ・・・

「うおおおおお！！！！！」

森を抜けて最初に聞いたのはウソップの雄たけび。てっきりタクミに任せて自分は観戦モードにでも入っているのだろうと想定してた

のにやるじゃない・・・ウソップに後ろから駆け寄る、!!!? 武器のパチンコを取り落としカトラスを持った敵が眼前に迫っているのにウソップは動かない、いや動けないんだろう後頭部からの激しい出血がその傷の深さをものがたっている。しょうがないわねえ助けてあげますか。

わたしは走ってきた勢いそのままにウソップの左後ろから飛び出し、右肩の上まで振り上げていた組立式の棍を、ウソップの鼻に触れる寸前だったカトラスを持つその手に振り下ろした。

べきゃっ!!!「!!!?」・・・カラアン

手首が碎ける確かな感触!! 敵はたまらずカトラスを手放す。自分の両手に残る感触に不愉快な気持ちになるが、そうも言っていない。インパクトの瞬間に絞っていた手を緩め棍を縦に担ぎ直し、一歩で相手と距離を詰める。肩から相手の懐に潜り込んで一本背負いの要領で棍を振るう。

ズガッ!!!!!!「でえふっ!!!!!!」・・・バタツ・・・

ナミの肩を支点に顎へと放たれたその一撃は容易に敵の意識を刈り取った。

ウソップに一発受けたのであろう足元で悶絶している敵の水月をついでとばかりにヒールで踏み抜く。あまりに流麗に行われた一連の動作を前に周りにいた四人の船員たちとウソップは息を呑む。

「ふう、・・・戦うのは好きじゃないのよね、引いてくれない?」

「何だこの女!!?メチャクチャ強えぞ!!!!」

「三人がかりで行け!!!!」

「ふざけんなお前が行けよ!!!!」

「……ドキヤ! バキ!!! メコッ!!!!!ズドンッッ!!!!!!」
「」「」「ギヤ————っ!!!!!!」「」「」

「話を聞かない相手は嫌いだわ!!!!」

「『どん!!!』って感じだな!」

ウソップがわけが解らない感想をいつてくる

「何よそれ???」

「まあ気にすんな！！にしてもお前こんなに強かったんだな！！」

「あいつらに比べたら普通よ」

「・・・なるほど（笑）比較対象が規格外だもんなあ」

「そんなことよりアンタ大丈夫なの？？間欠泉みたいに血が噴出してるわよ？」

ウソップの頭はリアルにそんな感じだったので本気で心配した。

「大丈夫だ！！おれはこの坂を頼むとタクミにまかされたんだから、せめてあいつらが来るまではここにたち続ける！！！」

「なあにかっこつけてんのよ！！・・・まあいいわ、ほら、肩貸してあげるから」

「・・・悪いな、ほんと結構イッパイいっぱいなんだよ・・・」

ちよっとだけ間があったけど割りと素直にしたがってわたしの肩に

身体を預ける。ほんの3分ほど離れていたただけなのにウソップは変わっていた。わたしはちょっとだけその姿がカッコイイと思っ
てしまった。

Side Out

シュレーディンガーのクロネコたち（後書き）

うちのナミさん戦えます。まあこれぐらいは出来ないと海賊専門の泥棒なんて無理なんじゃないかなあと思って書きました。

Side っってやってんのに普通に地の文で三人称がでます。ごめんなさい。直りません。文章を書くのは難しいですね。

殺される覚悟（前書き）

前半と後半でノリが違いすぎる。カオスだ・・・

殺される覚悟

だめだ！！届かない・・・俺なんか原作に介入したせいで主要キヤラクターが死ぬ。そう思ったときウソップの背後からナミが跳び出して来た。

ナミは華麗な棍術で敵を圧倒！！このレベルなら問題無いだろう。

「月歩」で崖の上に行き様子を伺うことにするか。重たい身体に苦勞しながら崖の上に到着。

「どれどれ・・・なあっ！！？」

ナミ強いな！想像以上だ、一人ひとりを一撃で的確に気絶させるなんて！！でも、最後の一人を柄の部分で突いたときズドンツツ！！！！っという音はちよつと・・・ズドンツツ！！！！って・・・
・あの船員死んだんじゃないか？

ナミの扱ってる武器はよくみると柄の部分が若干太くなっているタイプようだ、力がなくてもアレならうまく使えば相手を昏倒させられるし、捌きやすい。原作では只の棒じゃなかったか？

負傷したウソップに肩なんか貸してるし男前だな！！それじゃあ「紙絵武身」で二人と合流するか！！

—————スタッ！！！！

「驚いたよ！！ナミ強かつたんだな、ウソップも勇ましく戦ったみ

「ただしやるじゃないか。それはそうとアタマだいじょうぶか？」

「タクミ無事だったのね・・・まあ、当然か」

「ていうかさっきのアレは何だア！お前メチャクチャだよ！！みとれて不意打ちくらっちゃまったじゃねエか！！あと「アタマ大丈夫？」って言うな！！なんか馬鹿にされてる気がしたぞ！」

「それだけ元気にツツこめるなら大丈夫だ、どうだ？うちの一味にツツこみ担当で入らないか？ルフィに推薦しとくぞ！」

「ふっ！！ツツこみ兼船長キャプテンってことだろう？まあ、入ってやってもいいぜ！！・・・ってあほかア！！どこの世界にツツこみの腕を買われて船に乗る海賊がいるんだよ！！！！！」

「おお！！ノリツツこみも出来るんだな！！ハイスペックでお買い得だな！！！」

「ええええ、ついでにパチンコが得意で狙撃手も兼任、手先も器用。こちらのウソップが今なら何と19800ベリー・・・ってさすな！！！！！」

「やっぱウソップおもしろいねえ」

「ウソップ、もう止めときなさいきつとタクミは際限なくボケ倒すつもりだから、そんなテンションで突っ込み続けたら出血多量で死ぬわよ。・・・あなた死ぬわよ!!!!!!」

「ぎゃ~~~~~!!!!!!俺は死ぬのかア~~~~~」

一見心配しているようでその実ナミまでからかい始めた。・・・
哀れウソップ（笑）

「ナミ!!!!!!てめエ!!!!!!よくも俺を足蹴にしやがったな!!!!!!」

「タクミ!!!!!!ウソップ!!!!!!北ってどっちかちゃんと言っとけえ!!!!!!」

やっぱりゾロはナミの足場にされたのか、ルフィはもしかしたらナミと一緒にくるかもって期待してたんだけどやっぱりルフィもファンタジスタだったか。

「遅かったな、二人でどっか遊びにでも行ってたのか？ナミと一緒に来るように言ったと思うんだが？」

「そいつがおれをお」まあいいじゃない、わたしたち三人でほぼ壊滅させちゃってるし」・・・おい聞けエ！！て「タクミ、状況を説明してあげたら？」・・・もっいいい」

「・・・・・・・・・・」

ゾロはナミに被せられて諦めたみただけど、ルフィが言い訳しないねえ、明確な指示が出てたのに暴走した自覚があるのか？まあいいい。

「じゃあ説明する、二人が来るまでの間に俺が船長に特攻をかけて成功、船長はどっかに飛んでいってクルーも10人くらいは無力化した。その間の坂道の死守をウソップに任せてウソップが負傷、ナミが助太刀にはいつて6人・・・正確には5人か、1人はウソップがほぼ追い詰めてたしまあとにかく6人無力化に成功で今に至るってわけだ敵残存勢力は大体船の前でほうけてる10人くらいだな」

「無力化って頭が無くなってんのはありや何があつたんだ？」

「死角から攻撃されたから掴める所を全力で掴んだらああなった。まあもとから加減はしていないが」

「以外だな無闇に生態系を荒らすなっつていつもいつてるから殺さねえように闘うタイプだと思っただぜ」

「ここだ！ここでそれっぽい説教をかませばゾロの前で今後の実験に加減はいらないはず。」

「???可笑しなこというんだな?俺は海賊はみんな「殺される覚悟」のあるヤツ等だと思っただが違うのか?俺は命をかけて叶えたい夢があるからこの船に乗ったんだ。だからどこで死ぬことになっても構わない、まあ全力で抗いはするけどな。海賊はみんな理由は違えど信念を持って船にのってる。そんな相手に加減をするのは失礼だと思う、だから俺は戦うのなら全力で戦うことに躊躇なんかしない。それが「殺す覚悟だ」自分のために、そして仲間のためにな」

「……そうか」

あれ?何かルフィ達も一緒に聴いてたみたいだ手間が省けて助かった。皆がこちらに視線を向けてくるので取り敢えず微笑んでおく。ていうか敵さんも?何か呆けてた顔に喝が入ったみたいだけど……

あれ?

殺される覚悟（後書き）

主人公の後半の長セリフはどっかで聴いたような言葉を繋げただけです。ワンプいで読んだのかな？書いてるシーンのあたりを手元に広げて書いているので物語の先で出てくるセリフが出るときがありませんがご了承ください。

稀に意図的に書いてる場合もあります。

感想・評価をお待ちしています。

殺す覚悟（前書き）

初のルフィサイドオンリーです。

殺す覚悟

Side ルフィ

北がどつちなのか解んねエから適当に走ってたら目的地に着いたみてエだ。ほぼ同時にきたゾロと一緒に文句を言う。ゾロはナミのせいで遅れたらしい。遅れてきた理由をタクミに聞かれてゾロはくっつかかっている。たぶんタクミはおれ達二人のことをバカにしたみたいだ。タクミの言うことは遠回しな言い方が多かったり、よく解んねエたとい話をするからあんまり会話が続きかねエ。

タクミはたぶんナミと一番仲がいい。舟の上ではよく二人で話しているのを見かけるし、釣りしてるときにおれが話しかけても釣竿の一部になった見てエに動かねエし適当な返事したり無視したり、終いには「集中させてくれ」とか言いながら半獣になつて威嚇してくる、でもナミが話しかけたらちゃんと会話をし、釣りを止めて話して夢中になつたりする事もある。タクミはおれの飯を釣ってくれてんの。

昼寝ばかりしてて口数の少ないゾロも起きてる間はタクミと楽しそうに話していることが多い。そういう時はだいたい二人は酒を飲んでいることが多い。ここでもナミはタクミと一緒にいる。酒を飲んでるときタクミは難しいことはあまり言わないで珍獣のおっさんや島の動物達の話、それと好きな酒の話をしてることが多い。

だからおれはあの日タクミが酒とつまみの話をしてるタイミングを

見計らって「そんなにうめエンならおれも飲んでみてエな!!!」
と言ってみた。酒の話におれが入ってきたのが以外だったのか少し
驚いた顔をしてなんか考え込んでたみてえだ。これで話せる話題が
増えると思ってただけど「ルフィはお酒飲まないほうがいいんじ
やないか？」と言われた。

納得できねエから文句を言ってやったんだけど「実は俺は占いも出
来てな、ルフィには酒乱の相が出るから、お酒飲んだらダメだ」
だと、……馬鹿にされてるんだと始めて自分でわかったと思っ
た。いくらなんでも騙されねエ!!! 占いには虫眼鏡がいるんだ、
常識だ!!!

だからおれは夜中にこっそり飲んでタクミの嘘っぱちを証明してや
ろうと思っただ。……けど、2杯くらい飲んだあたりから記憶
がねエ……おれは酒を飲んで暴れたらしい、酒乱ってヤツだ。
タクミが真っ先に気づいて止めてくれたらしい。

頭の中がぐちゃぐちゃだった。占いのことをゾロに聞いてみると「
はっはっはっ!!! タクミなら何でも出来そうだな、それより虫眼
鏡使うのは手相占いじゃねえのか？」と言われた。常識だそうだ。

タクミに悪いことをしてしまったと思っただら赦してくれたん
だけど酒が無いタクミは釣りに集中するようになってあんまり喋ん
なかった。ナミとも喋ってないからタクミは本当に元気が無いんだ
ろう。おれにとっての肉みたいなものなんだと思う。

この村について飯屋で酒を飲むとタクミは元気になってゾロと二人
で喋っていた。元気になってよかった。これでタクミが酒が本当に
好きだったことと、占いが出来るってことが解った。短い付き合
いだけどおれはタクミの事を信頼してるんだ。

……でも

やっぱりおれはタクミの事をよく知らねエんだ。

何なんだこの状況はそこらじゅうに血が飛び散り頭や腹がねエ死体が転がってる。

本当にタクミがこんなことをしたのか？押し黙っているおれと、ナミとの言い合いが終わったゾロにタクミが状況を説明する。近くで気絶している6人はナミとウソップが坂から舟にかけて倒れているのは全部タクミがやったらしい。信じられないおれは「殺す」って言葉は使っけど本当に相手を殺そうと思っるとどめを刺したことは無エ。

戸惑っているとゾロがタクミに質問をした。何があったのかと、タクミは加減をしていないからだと答えた

おれと違ってタクミは本気で闘うだけで相手を殺してしまうことがあるんだ。そんな力を持ったらおれは闘えるのかわかんねエ。

タクミは相手を殺さないと思っていたとゾロが言った。ゾロは冷静みてえだ。賞金稼ぎをやっていたから見慣れているのかもしれない

でもタクミは？・・・おれはタクミの事をよく知らねエ。

「????可笑しなこというんだな????????」

タクミは答えてくれた「殺される覚悟」海賊はみんなそれを持つて
るって言った。おれも死ぬ覚悟はある。夢のために戦って死ぬなら
別にいいと思っっている。戦って死ぬそれは殺されるって事だ。海賊
はみんな命をかけたそれぞれの殺される覚悟がある。そんな相手に
手を抜くのは失礼だと言った。「殺す覚悟」も持たないといけない
と、だからタクミは迷わない、だからタクミは強いんだ。

おれはタクミのことがちょっとだけ解った。そして最後の一言で1
番大事なことがわかった。

「……………そして仲間のためにな」

そうだ、はじめてあった時からタクミは守る為に戦っていたじゃな
いか。そんなタクミがおれを信じて仲間になってくれたんだ。

今日だってタクミは仲間を守る為に戦ってくれたんだ!!!!!!

「……………そうか」

ようやくタクミの1番大事な気持ちがわかってタクミに目を向ける。

その時のタクミのはおれにとっても優しい目を向けた、とてもじゃないけどこんな戦場で見せる顔じゃなかった。

・・・そうだ！！みんなに飯を作ってくれたあと最後まで喰ってるおれにあんな顔して聞いてくるんだ、「うまいか？」って！！！！

俺はタクミのことがいろいろ解った気がする。

＼Side Out＼

殺す覚悟（後書き）

温度差が酷い。

コタツ布団をたなびかせ（前書き）

10万PV達成です！！ありがとうございます！！

コタツ布団をたなびかせ

Side ソロ

おれは迷ってる。おれらしくねエな・・・

タクミの言葉が焼きついてる。「殺される覚悟」、「殺す覚悟」・・・

言いたいことはわかったんだ。己が信念の為、仲間の為、信念ある敵の為、命を軽んじることなく全力で生きるとタクミは言ったんだ。

おれも共感できる、そのように生きてきたつもりだった。けど・・・

おれは賞金稼ぎを名乗ったつもりは1度もねエが「海賊狩りのソロ」と呼ばれてる。生きる為に賞金首を狩ってきた。おれは大剣豪になる、くいなどの約束だ。その為に生きてきたんだ。

ただどおれは碌に航海もできないまま海を流離う賞金稼ぎでしかなかった。始めのうちは賞金首を殺しちしまっこともあったが政府は公開処刑を望んでやがる、殺してしまえば賞金額が半分になっちまうてんで、手加減して殺さないようになった。おれに狙われ逃げ出そうとしたような覚悟のねエヤツらはどうでもいいが、全力を持つ

て向かってくる相手にもおれは手加減をした。

賞金稼ぎとしてなら合格だろう。捕らえること、それが目的なのだから、おれが目指す高みは大剣豪だ！！戦いに全力を出さないようなやつがそこへ行けるのか？

これからおれは全力で戦おう。殺すことが目的では無い、ただ全力で戦う。大剣豪の名を手に入れるそのときまで。

Side out

ルフィとゾロは坂の中腹に並びクロネコ海賊団の連中と対峙する。何か俺の演説を深く受け止めてくれたみたいで両者ともに覚悟を宿した眼つきにみえた。

まあ敵さんの何人かは逆にびびったみたいで船に引き返していった。それでいいんだウソップがこの戦闘をなかつたことにすると言った。以上クロネコ海賊団の船がここに残るわけにはいかない元気な船員も何人か残ったほうがいいだろう。

「ここから先はおれ達に任せてくれねエか？」

「別にいいけど危なくなったら助けに入るからな」

「相手が剣士じゃなかったらにしてくれ、これはおれの野望だ!!」

「ふっ・・・聞きそうにもないな。がんばれよ船の中にそこそこのヤツが2人いるみたいだから気をつけるよ?」

「それも占いか!？」

「これはハンターの勘だよ、ルフィ」

「にしっ!!そっか!!!!」

何かルフィ楽しそうだな。いいことでもあったのか? 途端にクロネ
コ海賊団の船員がざわつく船を見るとどうやらニャーバン・兄弟ブラザーズが
現れたようだ。船員たちの歓声をつけて船から飛び降りる。

スタタッ!!

「おいっ!!!!なんだこりゃ!!!!?」

「ジャンコ船長もやられちゃったってのはマジみてえだな」

どうやら先ほどの船に向かった船員は2人を呼びに行っていたようだ。身のこなしから俺が話したそこそこのヤツだと判断したのだから二人が身構える。

「・・・ルフィ」

「ああ・・・お前らア！！！！お前らの相手はおれ達だ！！！！覚悟があるなら前に出ろオ！！！！」

「猫かぶってる場合じゃなさそうだなシヤム！！！！」

「ああ全力で行くぞブチ！！」

「おおともよ」

背中を丸めてわざと隙を作っているシヤム、コタツ布団をたなびかせて並走するブチ、2人がこちらに駆けてくる、爪を武器にする相手ということぞゾロが一步前に出た。その時、不意に2人の足が止まり、何かに脅え震えだした。先程まで覚悟を決めた目をしていたほかの船員たちも皆が震えている。

船員の1人が何事かをつぶやきがくりと膝をつく。その視線の先には手首の内側で丸眼鏡を上げるクラハドルこと海賊”百計のクロ”・・・

「もう とつくに夜は明けきってるのに・・・なかなか計画が進まねエと思ったら・・・何だ このザマはア!!!!!!」

お嬢様を待つ必要は無いだろう彼女にはメリーの言葉で十分に真実は伝わっている。クロの口から辛い言葉を聞かされる必要もないだろう。

舞台は整った。役者は海賊、観客はいない。それでも舞台の幕は開く。

コタツ布団をたなびかせ（後書き）

浅いですね。

本戦開幕（前書き）

生命帰還で爪って伸ばせますかね？

元ネタはキルアなんですけど

「貴様、悪魔の実の能力者か？」

さすがクロ。一発で見抜いたか！！

「教えてやる義理はないがいいだろう。おれはライオンの力を手に入れた能力者だ！」

クロネコ海賊団の船員がどよめく中クロは”猫の手”をはめ、無音の超高速でシヤムとブチの後ろに回りこみにその刃を突きつける。

「……おいお前ら、……5分やろう、その餓鬼どもを消せ！
！それが出来ないのならお前ら皆殺しだ……その銀髪はおれがやる」

あれが”抜き足”かスピードは俺の「紙絵武身」での「剃」と大差がないな。誰に師事したわけでもないだろうにあの速度に加えて無音の移動術。化け物だな。クリークなんかよりよっぽど強そうだ。”疾さは強さ”とは誰の言葉だったろうか？

シヤムとブチは抜き足を前にして逆らうことは無謀と察したのか素直に命令に従う

「よつよし!!5分あれば何とかなる!!あいつらたいして強そうじゃねエ!!5秒で片つけるぞ、ブチ!!」

「よしきたシャム!!」

2人はルフィとゾロに対じする、さあ俺もクロで「剃」の実験でもしますか・・・想像以上に速いから「紙絵」の実験はまた今度にしよう・・・びびってる訳ではない・・・

俺はナミとウソップにお嬢様とお野菜三人組がくるかもしれないことを伝え、この光景を見なくて済むように坂の上で待機しておくように伝える。クロと打ち合う為に「生命帰還」で爪を伸ばして強化すると皆を巻き込まないように海岸へと駆け出した

Side ゾロ

「ネコ柳大行進!!」

暫くの睨み合いの後、2人がかりでの猛攻!ルフィは爪を防ぐ術が無いから高く跳び上がる。初撃は武器の性質を見極める為、見に入ったがどうやら愚作だったみてエだな。一撃でしとめてエが連撃を捌きながらの攻撃は得策ではないじゃねエ。

一度距離をとろうかと考えていると、空中から伸びてきた腕が細身の男を拘束した

「お前の相手はおれだア！！！」

伸びた腕を縮め、地面に降り立ち、今度は森の方に大きく首を伸ばすルフィ

「ゴムゴムの……………」

コタツの男はそれに一瞬気を取られる

好期と見ておれは大きく1歩後退し距離をとる。

コタツ（もうこの際そう呼ぼう）は距離を取ったおれの方ではなく、意図を察知したのか伸びきったルフィの首を狙いにいきやがった。

逃がさねエ！！！！

「虎……」

おれは十分に刀気を練り上げ得意の大技を構える。ルフィの首にコタツの爪が届こうかというその瞬間大きく踏み込み三刀を振るう

・・・狩り！！！」 - - - ガシユツ！！！！

背面におれの渾身の斬撃を受け、コタツが宙を舞う。そのときちょうどルフィの頭がゴムの弾性で凄まじい勢いで戻ってくる

・・・鐘っ！！！！」 - - - ガゴオン！！！！

ルフィの拘束から開放された細身の男は、だらりと力が抜け宙を舞っていたコタツと共に地面に倒れる驚いたことに2人も息があるようだ

コタツに入ったネコを狩るには”虎狩”は過ぎた技だと思ったんだが頑丈なヤツみてエだな。

さて、タクミはどうなったんだ？

海岸の方を見ると傷つき倒れるクロネコ海賊団の船員と長い爪を生やしたタクミがいた

クロのヤツはどこに行きやがったんだ？

みると船員たちの傷はつきつぎに増えていつてるようだ

眼を凝らして視てみると時折つつすらと影が見える気がする。

隣ではルフィが肩を震わせてその光景を見つめていた

「お前は仲間を何だと思ってるんだア!!!!!!!!!!」

普段耳にすることのないタクミの叫び声を聞いておれはその場の光景を理解した

Side ナミ

もと船長のクロの登場に1番脅えているのは船員たちのようなだった。クロはいつの間にか2人の部下の後ろに立っていて片手に5本の刃のついた手袋を突きつけてこう告げる

「……おいお前ら、……5分やろう、その餓鬼どもを消せ！
！それが出来ないのならお前ら皆殺しだ……その銀髪はおれがやる」

その様子を興味深そうに見つめていたタクミはわたし達に話しかける

「ナミ、ウソップ、……あの武器からはまだ新しい血の臭いが漂ってる。そのクロがここに来たってことは屋敷ではもう事が起こっ

てるかもしれない。お嬢様はきつとヤツを止める為にここに来る、たぶんウソツプん所のお野菜三人組もな。あいつらにこの光景をみせるのは酷だ。もしやってきたら坂の上で食い止めてくれないか？何にも心配するなっっていつてやれ」

タクミはわたし達に笑いかける。タクミが眼を閉じて集中すると獣特有の鋭い爪の4本がメキメキと音を立て30cm程伸びていく。クロと目を合わせた後、わたし達を巻き込まないため海岸のほうへと走っていった。わたしはタクミの願いをウソツプにまかせクロネコ海賊団の船へ向かう

こんだけ面倒な思いしてただ働きじゃ割に合わないわよ。

睨み合うルフイ達の横を通り抜けた先ではタクミとクロが爪と刃を交えて笑いあっていた

.....

クロネコ海賊団の船には質の悪い宝と少しばかりの現金があっただけで簡単にまとめられた

麻袋を抱えて甲板に上がると傷つき呻いているクロネコ海賊団の船員達の中でタクミが叫び声を上げていた

「お前は仲間を何だと思ってるんだア!!!!!!!!!!」

タクミ.....!!!?

S
i
d
e

O
u
t

本戦開幕（後書き）

戦闘描写が難しすぎる。

もっと心理描写が書きたい。それもシリアスじゃないヤツ

とばすわけにも行かないし・・・

感想・評価お待ちしています。

終幕〜finale〜(前書き)

作者は重度のラルヲタです。

終幕〈finale〉

クロを警戒しながら俺は海岸へと駆けていく。俺の意図はわかっているだろうがクロは俺についてきて、かつての船員に囲まれるかたちで俺と向き合う

「珍妙ななりだな。悪魔の実なんぞ喰いたくないとおもわされる」

そういえば東の海で動物系ソオンの能力者は見なかったな。

「そうだなこの実が持つ凶暴性にあてられて今にもお前を喰い殺してしまいそうだ」

「やれるものならやってみろ!!!」 - - - キーンッ!!!

すばやい初撃にくらいつき、「爪鉄塊ソウ」で受け止める。

俺は戦闘時「鉄塊」を身体の約5%以上にかけると動けなくなる。本来は50%程までいけるのだが、「生命帰還」による半自動制御の「獅子 鉄塊」に精神力を裂くとこれが限界。「爪 鉄塊」は爪を強化する性質上指にまで「鉄塊」をかけてなくてはならない。

刃物を使う相手との戦闘を考慮して修行したのだが普通に武器をもったほうが精神的に楽だったかもしれない。でも動物系が武器を使うのが邪道な気がしてやめた。

「獅子 鉄塊」の反応速度も自動制御のままではクロの速度に到底及ばないようだ。俺の無意識下での防衛本能によって動いて守る万能の鎧になる予定だったんだがまだ俺の意思で動かす際の初動を速めている程度の成果しかあがっていない。修行が必要だな！

俺はまだまだ上を目指せる。そう考えてクロをみるとクロは笑っていた。こいつ一般人になるなんてどっち道無理だったんじゃないかと思う。完全に戦闘狂の眼をしている。

腕力にまかせてクロの刃を振り払うとすぐさまクロが動く”抜き足” 対俺の「剃」は完全に互角。平面の戦いでは埒が明かない、「剃刀」で立体の動きをしクロのを翻弄する。

俺の攻撃を背に受けてクロは不適に笑う。殺そうと思えば首を取れたが今回は捕縛が目的、殺すわけにはいかない

「もういい。お前の速さはわかった。だがお前はまだ本物の海賊の恐ろしさを知らない。みせてやろう速さのその先を！！！」

クロは脱力し腕をゆらゆらと動かす。クロネコ海賊団の船員は慌ててその場を離れようとするものや命乞いをするものなど様々だ

”杓死” かいまさらそんな技で何が出来るといいうんだ？お前の速さがわかったのはこっちも一緒だって言うのに。

「杓死”！！！！”

「は？」

・・・いやまで、速い！！速すぎる！！何だこれは想定外だ！

”杓死” って技は周りで被害を受けてる船員が叫んでいるように
抜き足”での無差別攻撃じゃなかったのか？

・・・そうかそういうことか”抜き足”速さに目がついていつて
ないこいつらは”杓死”速さが理解できてなかったんだ。

駄目だ目では終えても追いかけて捕らえることはできない。精々迎
え撃つだけが意識下制御で広範囲に広げている俺の「獅子 鉄塊」
を警戒してか近づいてこない・・・？

・・・！！？俺は原作で語られなかった真実にたどり着いて
しまった。クロは”杓死”を完全に制御しきっている。おそらく関
係ない部分をわざと攻撃しそこに注意が向いたところをしとめよう
としているのだろう。ためしに右腕に隙を作り「鉄塊」をかけてい
るとそこを攻撃し、浅く打って離脱した。なるほど隙の少ない相手
にはヒット&アウェイでダメージの蓄積を狙っているんだ。一撃で
しとめられる隙を相手が見せるそのときまで

その為にこいつは仲間を無慈悲に切り続ける。

・・・ふっ！見つけた勝利への一本道！！決定的な隙を部分的に作る不自然さの無い行動！！！圧倒的有利を確信した相手を地獄へと誘う！！！！悪魔の咆哮！！！！！！

原作キャラの台詞を奪うつもりは無かったのだが、天を仰ぎ叫んだ。

「お前は仲間を何だと思ってるんだア！！！！！！」

Side クロ

腕に鉄板でも仕込んでいるのか？

唯一見えた隙をついた攻撃は金属音が響いただけに終わり再び適当な場所を切りつけながらヤツの周りを旋回する。本当に隙が無い、ヤツの鬣の力の正体が解れば対処のしようもあるが、おまけに服の下には鉄板を仕込んでいるようだ。

だが僅か数秒後、おれの顔には三日月の笑みが張り付いた

勝機！！！！

銀髪が天に向かって生温い戯言をはいた瞬間、おれはヤツの咽喉を目掛けて”猫の手”を薙いだ!!!

- - - ギイーン!!!!!!

!!!?・・・なあっ???

ヤツは明らかに生身の咽喉でおれの”猫の手”を受け止めた!!!
ありえん悪魔の実の力か!?

- - - ドシユ!!!!!!

「っがはあ!!!!!!」

両肩と両膝に鋭い痛みを感じ身体を見ると四本の極太の針がおれの身体を貫いていた。

おれの血に濡れて、怪しく輝くその針は間違いなくヤツの鬣だった。

Side Out

「獅子 針銃しんがん」

四肢の重要関節を貫かれ、地に横たわるクロに自分を倒した技の名前を教えてやった。技名は繰り出すときに告げるのがお約束なのはわかっているけど速度で上回るクロにそんな事やってたら逃げられるのでしかたない

俺に向けられる多くの視線を心地よく浴びながら告げる。

「終わったぞ、みんな!!!」

一味からは歓声、クロネコ海賊団からは畏怖のこもったやはり歓声

こうして舞台は終幕を迎えた

終幕〜finale〜（後書き）

戦闘描写は本当に疲れました。

主人公は力の使い方に無駄が多いです。いつか原作組に抜かれると思います。戦闘には参加させ続ける予定です。

感想評価お待ちしております。

カーテンコールのその後で（前書き）

ナミに心の平穏が訪れます。

きつとナミはこんな反応しないと思いますけど。

カーテンコールのその後で

クロ、ブチ、シャムを縛り上げる為のロープが欲しくてクロネコ海賊団にはなしかけると名前を聞かれた。

「俺はアイザワ・タクミ。ハンターだ」

「やっぱ聞かねえ名だな・・・アンタ何者なんだ？」

「だから言ってるだろ？ハンターだって・・・それと覚えておくといい俺は未来の海賊王の船員だ！！！」

・・・！！？

コイツ頭おかしいんじゃないの??? って感じの眼で見られたので言っておいた

「モンキー・D・ルフィ！！俺が海賊王にする男の名前だ！！近いうちに必ずその名を聞くはずだ！！！」

これでルフィの中の俺評価は上がるかな？飯以外あまり接点が無い

からたまには殊勝なことを言っておいたほうがいいだろう。サンジが加入したら俺の貢献度下がるし。

ロープを受け取り「お前らは帰っていい」と伝えると驚きながらも傷ついた船員達を船に運び始める。クロと違い、ニヤーバン・兄弟の事は返して欲しそうだったが人獣形態になると悔しそうに引き下がった。コイツら意外と慕われてんだなと思いつつもロープで縛る。

クロの”猫の手”はコイツがクロである動かぬ証拠として提出するつもりだ。ゾロが何故か物欲しそうな眼でこちらを見ていたがスル

！。
カヤお嬢様たつての希望でクロと対面させ、ウソップはカヤを送っていった。

クロネコ海賊団の船も出航しようやく海岸は静かになったのでナミにあの計画を打ち明けることにした。

Side ナミ

タクミは普通にアーロンに勝てるんじゃないかと思う。なんか頼んだらあっさり引き受けてくれそうだし。

・・・ダメダメダメッ！！そんな危険を冒さなくてももう少しでアーロンから村を買う為の一億ベリーが貯まるんだから！！

でもそのときはみんなを裏切らなくちゃいけない・・・こんなに辛い裏切りは初めてだ・・・

気持ちを落ち着かせてから、縛った3人の横に座るタクミの元に向かうと思ってもよらない提案を受けた

「俺はまだ海賊として政府に追われてない身だからさ、昨日、賞金稼ぎだつて身分を偽って海軍にクロのことを密告したんだ。手配書は失効してるけど、ここまで引き取りに来てくれる上に、懸賞金は即金で払ってくれてそのまま次の目的地に連れて行ってくれるってさ」

わたしの心は躍った！もしかしたらこれで一億ベリーが貯まるかもしれない今回の収穫と合わせてあと七百万ベリーで足りるはずだ！！

「そっそれで！！？」

「本当ならそのまま海軍船に引つ張っていつてもらってらくらく航海といきたいところなんだけどルフィが居たらダメでしょ？あいつ嘘つけないし。」おれはルフィ海賊王になる男だ！！！」とかいいかねないし。だからナミは二人を連れて次の目的地に先行しうて欲しいんだよ。ダメかな？」

肝心の金額を早く知りたいのだけれどあまりがつがつしたところを見せたくない・・・何考えてるんだろわたし、そのお金を持ち逃げしたときがタクミと別れる時だというのに・・・

「いいけど次の目的地って何処？」

「海上レストラン・バラティエって所！！俺の腕じゃ味付け一緒に飽きてきたし、栄養に偏りがあると思うから、本職のコックを誘いたいんだ」

確かにタクミの作る料理はおいしいのだが・・・何とか豪快過ぎる感じがたまにする。何より食材の調達から調理までを一手に引き受けるのは負担が大きいだろう。わたしも後片付けくらいは手伝ってるけど。

「なるほどね。ちなみにあいつらの懸賞金っていくら貰えるの？そんな条件じゃ満額じゃないんでしょ？」

自然な感じで聞けたかしら・・・あきらかに不自然だったかもしれないわね。

「流石ナミ！！察がいいね！！結構がんばって交渉したんだけど一千万ベリーしか取れなかったよ」

やった！！！！これでココヤシ村を救える！！！！みんな笑えるんだ！！！！

「タクミはそついう交渉得意そつね・・・まあわたしならもとの懸賞金のさらに上を狙えてたと思うけどね」

軽口をいって内心の歓喜をごまかす

「結構がんばったつもりなんだけど・・・まあいいか。で、この金は一味の金だからナミに預けるから自由にしてよ」

????????????????ん？意味が解らないわ。

「・・・はあ？どついう意味よ自由にしていって」

「そのまんまの意味だよ。そのお金をナミがどつしようが構わないつて事・・・お金・・・たくさん必要なんだろ？」

！！！？えつ！！何を言ってるの？タクミのこの言い方は・・・

「！！！？・・・タクミ・・・何を知ってるの？」

「俺は占いも出来るっていったでしょ？ってことで見逃してくれないかな。・・・ナミを助けたいだけなんだ・・・お金を受け取ってくれるならば、ルフィにこのことを旨く伝えてから言っただけよ・・・」わたしを一味に入れなさい”って「

本当の理由は言ってくれないけど、タクミは全部知ってたんだ・・・わたしの為に・・・ここまでのことをしてくれた・・・これからみんなと一緒にいられる・・・ココヤシ村は救われるんだ・・・そう思うと自然と涙が溢れてきた。

「・・・なつ何それ・・・わたしの・・・っ真似のつもり？・・・っ似てないわよっ！・・・！」

こんなことを言いたいんじゃない・・・涙はなんとかおさまった・・・ちゃんと気持ちを伝えなきゃ！！

「・・・でも！・・・ルフィにちゃんと言っわ」

「そっか」

タクミは優しく微笑んでくれた・・・わたしも自然に笑顔がこぼれる

「それからタクミにも……ありがとう」

その時、最近のわたしは心からわらえていることには気づいて、また
ちよつと泣いた。

Side Out

カーテンコールのその後で（後書き）

やりすぎましたね。

感想・評価お待ちしております。

どたばた出航劇（前書き）

感想って結構な数が残るんですね、ほかの方の作品の感想欄を見て始めて知りました。何か悪口が次々と入ってくるのでうれしい感想がすぐ消えてしまうと思って、問題が解決した感想とかを早めに消してたんです。

それが原因で「消された！！もうこの作者には感想は書かない」となってる人が居ないかと心配です。これからは只の悪口以外は消さないようにしますのでお気軽に感想をお書き下さい。かならず返信はします。

こういうことはあとがきに書くべきなのでしょうが、前書きのほうが目にとまると思いこちらに書き込みました。

そういえば先程アクセス解析を確認したら20万PV・ユニーク16000になってました。読んでくださる皆さんに感謝です。

どたばた出航劇

S i d e ルフイ

悪執事たちを倒してからおれとゾロは飯屋にいった。みんなで来ようと思つてたけどナミは宝の整理をしてるし、ウソップはお嬢様を送りに行つちまつた。タクミにまで用事があるから先に行つてると言われて、おれは結局ゾロと二人でここに来たんだ。

ナミが遅れてきた時にもタクミは一緒じゃなかった。てつきり二人で来ると思つてたからナミに聞いてみたんだけどタクミは海岸で一人バーベキューって寂しーい事をやるから飯はいらねエらしい。しかもこの島の生物調査を丸一日かけてやるらしくて今日は帰つてこねエんだと。

その後はナミが一味に入れるとか今更なことを言つてきて「おれ達とつくに仲間だろ」とこたえたり、のどに引つかかった魚の骨をとつてたらナミにあきれられたりしたけど、とりあえず飯は食つたから食料の買い込みでもして、舟に戻ることにした。

そしたら店のドアが開いて知ってる顔があつたから声をかけといた。

「ようー！お嬢様っ」

「至れり尽くせりだ、どあほ」

「”ど”は付けるなよ!!!」

心外だ!!失礼なヤツめ!!

.....

「.....行きましようか」

「.....はっ、はい、よろしいんですか?」

「いいのよ、いつもこんな感じだから.....それよりお酒だけは追加しておきたいんだけど、何処で買うのがおススメかしら?うちのクルーがこの村で買った「オロロソ・シェリー」が気に入ったみたいで樽で10個くらい欲しいんだけど」

「.....樽ではないと思います」

Side
ソロ

ルフィの文句につき合わされていたらナミに置いていかれたみてエだ。あいつは人をどっか置いていくのが趣味なのかもしれねエ。とりあえず店を出るか。

それにしてもクロの武器はちょっと欲しかったな。

Side ナミ

タクミと別れてルフィたちと合流したら、タクミはどうしたのかと聞かれたから冗談のつもりで「タクミは一人バーベキューするらしいわよ」と言ったら信じてしまったので本当の事を言うタイミングを失ってしまった。とりあえず急場しのぎにタクミが明日の出航まで戻らないと言っておいた。

でもこれだけは、今・・・今いっておかなくちゃ!!!

「ルフィ! 単刀直入に言うわ!!!」 わたしを一味に入れなさい!!!」

言った!!! 言ってやったわ何か” わたしの真似をするタクミ” を真似してしまっただけど似てたかしら?

「何言つてんだ？おれ達とづくに仲間だろ」

へっ??勝手に仲間昇格済み?・・・わたしバカだなあ・・・手を組むだけって言ったってルフィは聞いちゃいなかったんだ。わたしはとづくにこの船の仲間だったんだ。

その後はいつもみたいに馬鹿な話しをしてわたしはゾロとお酒を飲んで、もう店を出ようって時に屋敷のお嬢様がやってきた。

お嬢様はわたしたちに船をくれるらしい、どんな船かしら?楽しみだわ

ルフィが騒いでいたので置いていくことにした。ゾロがいれば大丈夫でしょうし。

わたしはタクミが樽で10個欲しいと言ってたお酒を思い出してここで買えばいいか聞いてみたんだけど、ボトルでしか置いてないみたいね。まあ足りないときは海上レストランで追加すればいいわね。

翌日の出航時、前日にお酒を飲みながら話を通していたゾロと二人がかりで説得してるんだけど、タクミをこの島に置いてく事にルフィが猛反発している。

ダメだ・・・ルフィは納得しそうにない。

本当どうしようかしら。あら?あれはタクミ?手招きしてるけど何かしら?

Side ウソップ

「ぎゃあああああああああああああああ」

今おれは坂道を転げ落ちている、昨日ウソップ海賊団の涙と感動の解散式を終え、海へ出る為に荷造りをすることにしたんだけど荷物が全部入りそうな入れ物がなかったから、村の雑貨屋で誰が使った？って感じの特大リュックを購入して海岸に小船の用意をしに行ったらタクミがいた。何でもおれが嘘にするって言った今回の事件がばれないように後処理をしてくれていたらしい。

お礼を言ってから一緒にバーベキューをして家に帰った。一晩中かかってリュックに荷物を詰めてる途中でタクミがきておれのベットで勝手に寝てから夜明け前に出て行った。

家から出るときに特大リュックがつかえて家が半壊したが何とかここまで来た。

「止めてくれーーーーーっ!!」

そして転がってる。海岸にはルフィ達もきているが言い争いをしてるみたいで誰も気づいてくれない。カヤは気づいてくれてるみてエ

だけど、あわあわ言ってるだけで助けてくれそうにもない。船に激突するのかと思っただけで何故かジャンプ台みたいなものが設置されていておれはそのまま羊の船首が着いた船に乗った。

S i d e ル フ ィ

出航の時になってもタクミもウソップも来ねエ！！ウソップは多分もうすぐ来るってお嬢様が言ってたから別にいいけどタクミはこの島で何日間か生物調査をしてからおれ達を追いかけてくるって言ったらしい。

それだけなら納得したけどその間にレストランでコックを探しとけ何て言ってたのを聞いたら我慢できなかった！！タクミは飯作るのが嫌になったからこの船をおりるつもりなんだ。そうに決まってる！絶対に乗せていくんだと譲らないでいると、ナミは呆れてどっかいつちまった。ゾロと言い合いを続けてたら何かが飛んでつてメリー号に乗った。あれ？よく見たらウソップじゃねえか！！

「ウソップ！！遅かったじゃねえか！！！」

ウソップに声をかけて船に跳び乗ったんだけどウソップはお嬢様と話があるみたいで直ぐにいつちまったから説得を繰り返すゾロとまた言い合いになった。

「ゾロ!!もう大丈夫よ」

「そうか、おれは後の事は知らねエぞ」

ゾロが船室に入っていつちまったから回りを見た

「・・・何で周りは海ばっかなんだ？」

S i d e O u t

どたばた出航劇（後書き）

難産の割りに面白くなかったです。

だめだ、こんなルフィを書くつもりじゃなかったのに、自分で書いてて謎です。

ルフィ書いてる時たいてい眠たい時なんですけど、気づけばネタ線張ってる作者がいます。逆スクロールしてまで張りに戻ってます。

もうこのままルフィはネタキャラ化すると思います。そのほうがまだ面白いキャラにできると思うので、ウソップと主人公の三人でトリオ漫才でもさせますね。

感想・評価お待ちしております。

舞台裏（前書き）

本当におもしろくありません。

22話の舞台裏です。書かなくても伝わるかなと思ってはいるんですけど一応書きました。

舞台裏

「はあ〜・・・」

ようやくルフィを送り出すことに成功した・・・本当に疲れた。そりゃあ溜め息もでる。ルフィはなんであんなにごねてたんだ？俺がいない間の飯の心配だろうか？

食材は大量に積んだみたいだし、ナミがおいしい家庭料理を作ってくれるはずだから問題無いと思うんだけど・・・ああ、有料らしいからそのせいかもな。

昨日ナミと別れた俺は、すっかり忘れていたクロたちの治療を行い洞窟に放り込んでおいた。ブチは結構危ない状態だったが持ち前のタフネスで乗り切るだろう。生かして引き渡せっていわれたのはク口だけだし。

その後は俺が暴れたせいで嘘にすることがより困難になった海岸の戦場跡を修復（血が付いた土を掘り返して埋めたりとか）。原作でこの役目を担った誰かがいるだろうから、そのうち手伝いが来るんだらうと思うっていた。

結果終わって昼飯のバーベキューを用意してる時にウソップが来た。取り掛かるタイミングが早かったみたいだな。ウソップはあの特大

リュックサックを買った後、小舟をここまで陸送で運んできたらしいから腹も減ってるだろうと思ってバーベキューに誘い、一緒に食事した。ウソップは俺にいじり倒された後に海岸のお礼を言っただけで帰っていった。

ウソップが帰ってからは島の生物調査を試みたんだけど殆どが家畜かペットで小動物しかいなかった。「剃刀」使って結構見て回ったけどこの日の新生物発見は16種類、そのうち珍獣島からの記録しかないからこの世界では新生物という定義に入る元の世界にもいたものが14種類、結果厳密には2種類しか発見できなかった。

高速回転する毒針ヤマアラシはちょっと食べれそうにもなかったから身体データを取りスケッチをして開放の後追跡、巣を特定してみると繁殖のシステムが卵だったのには驚いた。育児をしている固体が発見できず、回転している小さな子供を発見したので哺乳類では無いようだ。

草原をアグレッシブに駆け回るコアラの群れはハーレムの形態を取っているようだがはぐれのオスの数がかなり多く調査対象のハーレムのボスは調査中の1時間の間にボス交代の決闘を3回も申し込まれていた。食べてみた結果はウソップ宅のトイレに駆け込むという残念な結果だ。数時間ベットで仮眠を取り調査再開。

新しい発見も無くそろそろ出航の時間だろうとメリー号が停泊しているはずの北の海岸に向かうと船の説明は終わっているようだがなにやらもめていたのでナミを手招きして事情を聞くとルフィが納得していないらしいこうなれば強引に出航させてしまおうとナミに策を授けて俺はブチが割った岩盤でウソップ発射台を作り上げる。飛んでいったウソップを「剃刀」で起動補正し船に乗せる。今の行動は誰にも見られていないはずだ。気分はト〇・クルーズ!!

ウソップを追い船に乗ったルフィに間を置かず説得を続けるように
お願いしてゾロ投入。

出航準備を整えていたナミによってルフィが気づかぬ間にメリー号
は沖へ消えていった。

ミッション・コンプリート!!

まあこれだけ動き回れば疲れも貯まるって事で今日は半壊してるは
ずのウソップ邸で昼寝でもしよう。

あしたはネズミが来るしね。

舞台裏（後書き）

主人公のハンターとしての姿だけが今回本当に書きたかったところなんですけど淡々とした文でそこだけ生き生きとした主人公書くのも変かなあと思ってたけどそこも淡々と書いてしまったんで過去最悪におもしろくないですね。

消そうかなとも思ったんですけど不眠で書いたのでなんかもったいなくなりました。

次回からがんばります。

ネズミ大佐（前書き）

大佐は意外と優秀です。

ネズミ大佐

S i d e ネズミ

「チチチチチチチチチチチチ」

今日はあの”百計のクロ”が手に入る日だ！！笑いが止まらない。

少し悩んだがクロは自分で捕まえた事にして出世の手柄にしよう。
これでおれの准将昇進は確実だ。

あの賞金稼ぎ、部下の報告ではタクミとかいってたな。あいつは世渡りつてもんを解ってる。強すぎる賞金稼ぎは政府に目を付けられる。やってることは海賊と変わらんヤツ等が多いからな。下手を打って自らが賞金首となってしまうことを防ぐ為におれに取り入ったんだろつ。

”百計のクロ”を捕らえると自身を持って言えるような賞金稼ぎはこの東の海にはまずいない。あの”海賊狩りのゾロ”なら可能かも知れんが魔獣のような男と言われるくらいだ、腕自慢の直情型と見てまず間違いは無いだろつ。百計を出し抜くのは難しいだろつな。

その点あいつはかなりの策略家に違いない。あいつは初め出世に関

わる話だと言って電話をかけてきている。つまりは最初からおれが自分の金で賞金を払い手柄を取りに来ると決め付けていたって事だ。その上で一千万ベリーをお買い得みたいな言い方をしやがった。あいつはおれの懐ぐあいをしっている。一千万ベリー、支部の大佐が簡単に動かせる金じゃないあいつはおれとアローンの繋がりに気づいてるんだ。

出世欲のあるヤツはたくさんいる中交渉相手にわざわざおれを選んだのは、おおかた金で動く人間なら信用できるってところだろうな。おれも同じ意見だ、いいパートナーが見つかったぜ。

Side Out

昨日はよく寝たなあ。昼寝のつもりが夜まで寝てしまったけど、お気に入りのシェリーを飲みまくってたら気がついたら朝だったしな。

この島最後の生物調査は完全に空振りだ。途中で羽が生えたトカゲを見つけて超小型のドラゴンかと心躍ったのだがよく見ると蝙蝠の羽を薄皮に縫い付けてあるだけだった。あの技術力からするとウソップの仕業だろう。

ウソップ海賊団の面々で追いかけるドラゴンが現実味に乏しいからトカゲをデコレートしたんだろうけど、ほんとう・・・ひどいことするな。

その後も収獲は無くネズミとの約束に遅れないように早めに南の海岸へク口たちを運んで行き、そこで酒盛りをしながら待つことにした。

S i d e ネズミ

時間より遅れて約束の海岸に接岸する。ここに来る前に北の海岸を見てきたのだがやはり間違いなかった。戦闘はおそらくあの場所で極最近に行われている。

わざわざ南の海岸と指定してきた時に疑問に思ったものだ近くのほかの海岸で戦闘を行うつもりではないかと、あの海岸には土を返したばかりの場所がいくつもあったさらには埋めてはいるが隠しようがなかった円を描くように残った斬撃の跡、ク口はおそらく噂に聞く”杓死”を使ったのだろう。そしてそれを打ち破った。それほど男だ自分が賞金首になるのを防ぐ為に破格の対価をおれに渡すのもうなずける。

船から降りて、その男の姿を見て戦慄した！！その身体に、顔にただ一つの傷すら無い！！！！

戦闘が行われたのはおそらく電話があった3日前以降、傷が癒える時間は無い。この男は海軍の一線を相手どり全滅させるような男を無傷で倒したってのか！！！！

「チチチチ・・・君がタクミくんかね？おれが海軍第16支部大佐のネズミだ」

おれは努めて冷静にいった交渉ごとでは相手に弱みを見せてはいけない。必ずこの男はおれの下につけてみせる。

「お初にお目にかかります大佐殿、専属賞金稼ぎをさせていただくアイザワ・タクミと申します」

言葉は丁寧だがこの男のそれは相手に意図的に威圧感を与えてやがる。やっかいな相手だが実力があるなら問題ないだろう。

「そうかね。では早速”百計のクロ”を見せてくれたまえ」

「ここに」・・・グアラン！！！！

タクミが横に並べてある大きな樽の一つを蹴り倒すとそこにはロップで縛られたクロが呻き声をあげていた

「これがクロが使っていた武器、通称”猫の手”です。検めてください」

本物だ！！！！コイツは”百計のクロ”手配書どつりの顔にこの武器
！！！！間違いようが無い。

「結構！！！！残りの樽は幹部のシャムとブチだな？」

「その通りです。こちらも捕縛に成功しておりますが、検められま
すか？」

「いや、構わんよ。お前らさっさとコイツらを船底に放り込め！！
！！！！さあ君も乗りたまえ海上レストランへ案内しようじゃない
か」

「それではお言葉に甘えて」

タクミは海軍船にジャンプして乗り込んだ

この男本物だ一流の賞金稼ぎだ！！！！こんなヤツが俺の配下につけ
ばおれの出世は約束されたも同然だ！！！！

おれは船に乗り込み出航の指示をだした。

ネズミ大佐（後書き）

なんか大佐クールになりすぎましたね。

なんかここ何話か書くの疲れたんですけどさらっと気楽にかけました。

次回は先行したナミたちを楽しく書きたいと思います。

感想・評価おまちしています。

こちらゴーイング・メリー号甲板大砲前ウソップ（前書き）

作者試行錯誤の最中です。ロビンとくつつけるにしても、このままナミも一緒にとの意見が結構来てます。

期待に応えようかなと思いついたのですがどうでしょうか？

ロビンは絶対なんですけど今のところ「ハーレム及びナミ推し派」6対「ロビン派」1（作者）なんですよね。「ロビン派」はほっといても作者のロビンルートを信じているのだと思います。

作者的にその分岐点はまだまだ先なのでそれまで意見を聞こうと思います。

こちらゴーイング・メリー号甲板大砲前ウソップ

Side ウソップ

「あーあー……こちらウソップ、こちらウソップー！ルフィ、聞こえますかどおぞー！……」

……ドウンー！

「ん！……お前何やってんだ、突然！」

「大砲の練習だよ。でもうまく飛ばねエもんだな」

「……つてオイ！……何この距離で道草食ってんの！？船の端から端まで集中力もたねエのか！」

「おっ！ー！ウソップもやってみねエか？」

「やってみねエか？じゃねエエエ！ー！お前が船内無線が欲しいって

いつから、糸電話作ってやったんだろうが!!糸だるんだるんだぞ??だるんだるん!!!!」

「そんなもん無くても声きこえてるじゃねエか???それよりお前やってみるよ!!!!」

「……………一発じゃあ!!!!いつぱいで当てたるわア!!……………あの岩か……………っココだア!!!!」

……………ドゴオン!!!!

「すげー……………当たった、一発で!!!!!!」

「んナ!?言っただろう?おれを讃えるならキャプテンと呼んでいぜ!!!!」

「お前は”ツツこみ”だつてタクミが言つてたぞ?」

「……………あ・の・野・郎……………!!!!合流したら精神的攻撃だ!!!!
スピリチュアルアタック
!もうむし!!!!ムシムシ!!!!」

「はっはっはっは!!!!!!やっばお前おもしれエなア!!!!そう言つて

からかってみたらって言われただけだよ。お前はさ、”狙撃手”に決まりだな！」

「まア”ツツこみ”よりは、ましだなひとまず”狙撃手”に甘んじといてやるが、おれの渾身の力作”糸電話EX”を無駄にすんじゃねエ、遊ぶぞー!!」

「だってそれって、無線じゃねエじゃん」

……ルフィにまともにツツこまれちゃった。

Side
ゾロ

……ドゥーン!!

帆を書き終え、おれとナミが休憩を取っていると船に轟音が鳴り響いた

「ん!?!? お前何やってんだ、突然!!」

「大砲の練習だよ。でもうまく飛ばねエもんだな」

あいつにそんな事させてたら碌なことが起きねエから止めようかとも思ったけどウソップが行ったから任せよう。

それよりナミが少し心配だあの二人と要るときは楽しそうに笑ってるし別にそれが演技の様には見えねエ。けどおれと二人の時はあんまり喋らねエで何か考え事をしてる見てエだ。たぶんおれからほとんど話しかけねエからだと思うけど。

昨日の夜はタクミの為に買った酒を一人で飲んだ。まあ何となく理由がわかったけどおれにはどうしようもねエから黙って一緒に酒飲んだだけだ。

あんなにタクミを置いてきた事に憤慨していたルフィはウソップとわいわいやってる

こいつもあれぐらい気楽になれりゃあ楽だろうに。

まあ一人にしとくのもなんだし、暫くはここにいろか。

S i d e
ナミ

タクミを置いて出航した昨日はルフィがうるさかった。あまりにすこいから「わたしの為にやってくれてるのよ。・・・」

今はわたしに勇気がなくて言えないから。もう少し待ってて」と言う
うと、「そっか、タクミらしいな」と一言いって納得したみたいだ

ルフィは何かタクミのこと解ってるんだなと思った。話さなくても
解るんだろう、男っていいなと思っいなながらタクミに買った「オロ
ロソ・シェリー」を一人で飲んでたらテーブルの向かいにゾロが座
った

ゾロは黙って一緒に飲み始めた。ゾロはわたしを心配してくれてる
んだ、それくらいはわたしにも解ったから。心の中でだけありがと
うと呟いてわたしはこち良い酔いを楽しんだ

ルフィデザイン、ウソップ主導製作で海賊旗と帆が完成してゾロと
わたしはメインマストの下で休憩してる。ゾロはやっぱり何も言わ
ないけど昼寝もしないでそこにいてくれる優しさが嬉しかった。

Side Out

こちらゴーイング・メリー号甲板大砲前ウソップ（後書き）

ぜんぜん進まなかった。ギャグノリでバラティエ到着させるはずだったのに原作1話にも相当しない進行具合。

長くしても良かったんですが、ナミ視点で終わらせやすいんですよ。なんとなく終わりにしたほうが綺麗に見える気がしました。

今回の話、別にナミを気の多い女にするつもりじゃないです。

感想・評価お待ちしております。

本当に怖い海上の医学（前書き）

壊血病怖いですね。

本当に怖い海上の医学

Side ジョニー

「・・・しつかりしろっ！！ヨサク！！・・・大丈夫だから・・・きつとだいじょうぶだから・・・」

おれは賞金稼ぎのジョニー。おれと相棒は岩山の下で休んでいる。いや、休まざるを得なかった。相棒のヨサクは、ほんの数日までピンピンしてやがったのに、突然青ざめて気絶をくり返し、昨日は口から血が滲み出して歯が抜け落ち、ついさっき古傷が開いた。

相棒は死ぬのか？いや、・・・そんなわけねエ！！何年も共にユニット組んでやってきたんだ！！大切な相棒なんだ！！ヨサクが死ぬわけねエ！！！！

・・・ドウン！！

「！！！？・・・何だア！！！！

突然の轟音に海を見渡すとふざけた船首を付けた船の大砲から煙が上がっていた。どうやらおれ達を狙って砲撃してきたようだ。あわ

てて錨をあげて舟を出す準備を始める

……ドゴオン!!

くっ!……っおい!!ヨサク!!大丈夫かヨサク!!」

差ほど間を置かずに放たれた2発目の砲弾が岩山に直撃し岩山は吹っ飛んだ。砕けた岩石がヨサクに降りかかるが、おれが必死に庇った甲斐あつてかヨサクは無事なようだ。紙一重だ。

この距離からの砲撃、2発でここまで合わせてきたって事はかなりの腕の砲撃手が乗つてると見て間違いねエ!!!早くこの場を離れねえと、ヤベエ!!!

……

……!?!…いつまで経つても3発目を撃つてこねエ所をみるとあの海賊ども遊んでやがったんだ!!!赦せねエ!!!遊びでおれの相棒を殺す気か!!!

おれは怒りをあらわに今は静かな羊の船首の海賊船へとむかった

……バキバキッ!!

「出て来い海賊どもオーっ！！！！てめエら全員ブツ殺してやる！！」

手摺りを壊しながら船にあがり声の限りの叫びをあげる

「……………えっ！！？」

羊船のメインマストそこにはゾロのアニキが背中をあずけて座っていた

S i d e ヨサク

おれは賞金稼ぎのヨサク。いやー今回は本当に死ぬかと思った。記憶も曖昧だけど突然、貧血みてエになってそれからその繰り返し、口の中に血の味がしだして歯も抜けた、腹の傷が開いてからは何にも覚えてねエ。

気がついたら麦わら帽子を被った男がでかいジョッキでおれにライムジュースを飲ませていた。ライムジュースつつつかライム生絞りみてエなもんで正直しんどかったが「飲め、飲めば治る」と言われたから我慢した。

飲んだら貧血みたいな感じがちょっと良くなった気がする。オレンジの姐さんの話を聴くに、要は栄養不足だったらしい。相棒も心配してるみてエだし確りしなきゃならねエな！

「栄養全開、復活だーっ！ー！！」

「おお、やったぜ相棒……！！！！」

「そんなに早く治るかつ！！！！」

・・・手厳しい姐さんの言う通りまだふらふらで口からは血が滲んでるタバコも血の味しかしやしねエが自己紹介をすませてお礼を言っておく。

「！！、ブヘエツ……！！！！」

「ぬあっ！！！！？相棒オー！！！！！！」

「いいから黙って休んでろ！！」

・・・やっぱりまだ無理みてエだ。ゾロのアニキの言う通りにおとな

しく休んで話を聞くとゾロのアニキ達はあの海上レストランに向か
つてる途中らしい。あそこは”鷹の目の男”が現れたって話もある
場所だ!!こりゃあ、ゾロのアニキと”鷹の目の男”の頂上決戦が
見られるかも知れねエ!!!

「ジョニーに”鷹の目の男”の話を聞いたアニキは武者震いを起こし
てるみてエだし、おれ達はこの船と一緒に海上レストランに向かう
ことにした。」

S i d e ルフイ

「着きやしたっ!!!海上レストラン!!!」

「ゾロの兄貴!!!ルフイの兄貴!!!ウソップの兄貴!!!ナミの姐さ
ん!!!」

こいつらはヨサクとジョニー!!!ウソップの村を出た次の日から一
緒に付いて来てるおもしれエヤツらだ!!!

「でっけー魚!!!」

「ファンキーだな、おい!!!」

レストランに夢中になってたらいつの間にか海軍の船が近づいてきて、ヨサクとジヨニーは隠れやがった。

「見かけない海賊旗だな・・・おれは海軍本部大尉”鉄拳のフルボデイ”・・・船長はどいつだなのってみろ」

手に螺子みてエなのを付けた偉そうなヤツがおれ達に聞いてきた

「おれはルフィ海賊旗はおととい作ったばかりだ！」

「そうか、おれは今日は定休でね、駆け出しの弱小海賊をかまってる気は無いんだ。次に会ったら命はないと思え」

ムカつくことを言われて文句でも言ってるのかと思っただけどナミに止められたちまった。

「おい、やべエぞ!!!あの野郎大砲でこっち狙ってやがる!!!」

「何イ!?!」

みんなが騒ぎ出した。海軍の船の砲身は確かにこつちを向いてやがる

……ドウンッ!!

「撃ちやがったア~~~~っ!!!!」

おれは素早く手摺りの上に立つ

「任せろっ!!!!ゴムゴムのっ……」

おれは大きく息を吸い込む

「おい、ルフィ!!何やってんだ!!!!?」

……風船っ!!!!」

……ドス!!

おれは膨らんだ腹で砲弾を受け止めそのまま

「返すぞ砲弾っ！……！」

……びよーん！……ゴーン！

「どっくに返してんだバカッ！……！」

「……何やってんの？」

……タクミ！？」

おれが砲弾を撃ち込んだままだったレストランの扉からは、タバコをくわえたタクミが出てきて、心底呆れた表情でこっちを見ていた。

Side Out

本当に怖い海上の医学（後書き）

原作みたいに血を吐いたりはしないらしいです。

成人の場合、3ヶ月〜12ヶ月ビタミンCを摂取しないと作中のような症状が出るみたいですね。作者はこれ調べたあとビタミン剤飲みましたよ。

次回はようやくタクミを書きます。

感想・評価おまちしております。

ネズミ大佐の贈り物（前書き）

これ書いてたら大佐活躍させたくなりました。

ネズミ大佐の贈り物

S i d e ネズミ

今日はタクミを乗せて3日目、目的地の海上レストランにはもうすぐ着く。

この男が船室ではなく甲板にいるのは、おれと手を組んだと言ってもこの船において自分が異分子であることを自覚しているからだろう。船員の一人とは仲良くなったようで、そいつと二人でいることが多かった。何か探れるかと思いついたのだが当たり前障りの無いこと以外喋らず、重要なことははぐらかされた様だ。

警戒されてしまったようで今は一人で手摺りの上に座ってタバコを取り出している。先程、おれが吸っている銘柄が昔吸っていたタバコと似ているとかで興味を示してきたので、買い置きを10箱程渡してやるとたいそう喜んでた。マッチを持っていないようだからやろうと思ったのだが、タクミは指を弾く。明らかな金属音がして火花で火をつけた。

この男は一体何なんだ！？人間ではない何かを見たような気分になり目的の地寸前で声をかけてみた。

この船で唯一できた俺の呑み友達はおそらくネズミに目をつけられてスパイになってしまったようだった。少しだけ寂しいが仕方が無い。一人で酒を呑んでいるとネズミがタバコを吸っているのが目に入って驚いた。横長のブルーのパッケージにジプシーの踊り子、元の世界で俺が吸っていた白銀比のタバコ。俺の名前はこのタバコを愛煙する、とある架空のキャラクターから頂戴したものだ。懐かしくなっておもわず大佐に声をかける。

「大佐殿？そのタバコ拝見してもよろしいですか？」

「・・・構わんよ？」

タバコを見せてくれなんておかしなことを言う俺に困惑気味で大佐は俺に箱を渡してくれた。パッケージには「ジゲン」

「・・・そつち？しかも仲間の方がよ設定にはあるけど実際吸ってんの見たことねえよ！！！！」

「気に入ったんならあげてもかまわんよ？買い置きならいくらでもあるからな」

「本当ですか！？いくつか売ってくれれば、嬉しいんだけど！！」

「チチチチ……おれがやった金で買うつていうのか？金はいらんから貰つとけ。喋り方もそのほうが自然だからそうしろ。おれも疲れた、堅苦しいのは嫌いなんだ。おい、そこのお前！！おれのタバコ10箱くらい持って来い。タクミに渡してやれ」

若い海兵の一人がタバコを取りに走っていく。ネズミいいヤツなんじゃないのか？一瞬そう思ってしまったがそれは無いだろう利害関係が一致してる間だけの友人だ。もうすぐレストランに着くといつてたし、まあそれまで仲良くしとくのもいいか。

「ありがとうございます。ネズミ大佐」

「別にいい」

そういつて大佐は船内の見回りに戻っていった。もう少し会話が弾むかとも思ったが、誘導尋問なんかされたくないこっちとしては別に構わない。

「賞金稼ぎ殿！！」

若い海兵がタバコを持って帰ってくる。お礼を言つと敬礼で返される。この船で俺は”賞金稼ぎ殿”と呼ばれている。行動自由、酒飲み放題の結構な厚待遇を受けている。用心棒のような扱いなのだろう。

船の手摺りに腰かけタバコを取り出す。マッチを貰い忘れていたが某美食屋の指マッチが今なら出来るかなと思いやつてみたらあっさり出来た。やり方は美食屋と違うと思うけど。

一口目を軽くふかし、二口目を大きく吸い込む。

・・・同じ味？正直よく解らん。この身体でタバコを吸うこと自体が初めてだ。あまり美味しいとは思わないが誰だつて最初はそんなものだろう。1箱だけネズミに貰つた防水ハンティングポシエットに入れ、残りは一千万ベリと一緒にこれまたネズミに貰つた革の鞆に入れる。どちらも上等な品だ。何かネズミからは貰つてばっかだな。

海を眺めて紫煙を燻らせているとバラティエが見えてきた。船がバラティエの目の前まで来たそのとき、不意に肩に手がかりおもわずその場を飛び退いた。

S i d e ネズミ

声をかけた瞬間タクミの姿が消えた。そう、消えたとしか言いようが無い速さだった。辺りに目を向けるとタクミは後ろにいた。これ

がクロを倒した力か。つくづく人外な男だ。

・・・？今の反応はおかしくないか？この男、これまではこちらを警戒していることをなるべく表に出さない様に振舞ってきたと言うのにこの反応はあからさま過ぎる。

「驚かせてしまって悪かったな、そう警戒しないでくれよ。あんな所にいたら海に落ちてしまうから注意しようとしただけだ」

「そうですか。タバコの灰が甲板に落ちないようにあそこに座っていたんですけどもう止めておくよ」

？・・・！？なるほど、そういうことか。今の言葉に嘘はなさそうだが、警戒を解くために言ったおれの言葉への僅かな表情の変化。武器を持ってないタクミがつけたにしてはおかしなクロの傷跡。答えは一つしかない。

「チチチチ・・・気をつけてくれよ大事な共存相手なんだ。能力者が海に落ちては大変だからな」

「！？・・・はあ、なんでそのことを？お話してなかったと思いますけど」

やはりそうか、チチチチ張ったりは言い切ってこそ意味がある相手

が認めてしまえば理由なんてどうでもいいんだ。

船はゆっくりとレストランに横付けされる

「わたしは何人かの能力者と会ったことがある。みんな同じだ海を過剰に怖がる。武器を持っていないものが見つけたとは思えない”百計”の傷跡とさっきの行動を見れば答えは誰でもでるだろ？」

「大佐は優秀ですね。誰でもなんて無理ですよ」

「褒め言葉は素直に受け取ることにしてるからな。褒美をくれないか？」

「……何ですか？」

「能力をみせてくれればいい」

「……わかりました」

タクミの容姿が変化していく、おれはその光景を固唾をのんで見守った。

タクミが船を下りるときその背中に声をかける。

「タクミ、共存相手となる君に褒美を受け取ったままなのは心苦しい。おれからはこの二つ名を君に送ることにしよう・・・」銀獅子
”・・・”銀獅子のタクミ”君の武運を祈る「

Side Out

・・・ありえねえ！！何なんだあいつ、こつちの世界であんなにはつきりと出し抜かれたなんて初めてだ！！逃げ場が無い海の上で断れるかよ！！最後までかっこつけやがって！！

ダメだ落ち着け・・・ネズミなんて端役が初黒星の相手になるとは思ってもいなかった。ダメだ人獣形態になったのに体動かさなかったからストレス溜まつてるんだ・・・

とりあえずレストランに入るか。メリー号が無いって事は先についてしまったのか？海軍の高速船凄いな！！

「いらっしやいませいカ野朗！！」

・・・ブチッ！！

「ふざけてんのかこの店は！！なんだイカ野郎って！！ホール長つれて来い！！！！！！」

・・・八つ当たりでは・・・無い・・・はず。

「へボイモおそれ入りますがホール長は昨日逃げ出しました。おとといきて下さい」

あ、ダメ、キレそう・・・見る分にはおもしろかったけど今の精神状態では笑えない。思いつきりぶん殴ったら原作に影響するかな？
・・・しないだろ？パティだし。よし！

拳をゆっくりと振り上げたその時

・・・ドウンッ！！

あ、あいつらもう来たんだ。パティを放置してタバコに火をつけ店を出る。

・・・ドゴーン！

まあ知ってるけれど聞いておじつ。

「…の？」
「ちっ」

ネズミ大佐の贈り物（後書き）

今回は書きたいことがちゃんと書けました。

” 麦わらのルフィ ” もネズミが名付け親みたいなもんなんで、

主人公の二つ名もネズミから拝命しました。

感想・評価お待ちしております。

ナミの決意（前書き）

海上レストラン編からの展開を悩みに悩んで現実逃避していました。この原作の台詞が良すぎるんですよ。

弄りたく無いんです。詳細な描写を望んでた方には申し訳ないのですが原作丸写ししても意味が無いので、主人公は関わらないルートを選択し、描写を避けます。

ナミの決意

Side ナミ

ルフィが砲弾をレストランに向かって撃ち返してしまった後、気づいたらタクミがレストランの入り口に立っていた。驚いているわたし達をよそにタクミは呆れ顔でメリー号に上がってきて、さっさと謝ってこいとルフィを送り出した。聞くまでも無く状況を察したのだろう。

船内を案内してくれと言うタクミにわたしがその役を買って出た。二人になれたので状況を聞いてみると海軍の船はタクミの想像以上に速かつたらしく、わたし達が付くよりほんの少し先に到着していたらしい。

海軍大佐に話を通したと聞いていたのでどんなヤツだったのかと聞いてみると、恐ろしく切れ者で最後にタクミは出し抜かれて能力をさらしてしまったらしい。悔しそうに話すタクミはちょっと子供っぽかった。

そう言えばタクミの歳を知らなかったのを思い出し、聞いてみると「たぶん25歳」といつていた。わたしはいろいろ聞きたいことがあったのだが「それより」とタクミに話しを遮られた。

「単刀直入に聞くけどナミはアーロンパークがある島の出身なんだろう？」

タクミは核心に触れてきた。わたしはタクミにはどうせばれているんだろうと思つて頷く。一応理由を聞いてみたら、刺青を見てしまったそうだ。隠してきたつもりだったんだけど。

タクミは暫く考え込んだ後、最悪の可能性を示した。

「ナミは故郷の為にお金を貯めているんだろうけどそのお金が危ないかもしれない」

思わず血の気が引いた。あのお金はわたしが8年間かけて必死に貯めたお金だ。

どういう事なのかと聞くと、タクミが乗った船の所属は第16支部アーロンパークの近くだ。情報収集のためにわざとその支部を交渉相手に選んだらしいのだが、隙を突いて潜入した大佐の私室でとんでもない書類を見つけてしまったらしい。

わたしはその内容を聞き絶句した。アーロンから大佐への賄賂の記された帳簿。そしてアーロンが試算したのであるう、わたしが貯めているお金の帳簿まであったらしい。その記録はわたしがアーロンに支配されることになった8年前から記されていたそうだ。タクミから聞かされたその金額はおおよそ間違つてはいない。

おそらくアーロンは目標金額に届きそうになったその時、その大佐を使って金を押収し、横紙破りをするつもりだろうというのがタクミの考え。ココヤシ村は救われないのだ。わたしは絶望に沈んだ。

「……こうなったらもうルフィ達に本当の事を話そう。おれ一人じゃ解決できそうにも無いよ」

タクミの意見はこうだ。ルフィが戻ってきたらいったんコックの事は忘れてココヤシ村に向かい、お金を移してから対応を考えようと言っただ。

……迷った。おそらく数分間、わたしは思い悩んでいた。みんなに迷惑をかけてしまう、そのことが怖くて堪らなかった。

何でわたしは今までアーロンの事なんか信用していたんだろう。

アーロンはわたしが一億ベリーをそろえて持っていったとしても受け取らないつもりだろう。そんなに目立つ荷物をもってわたしが戻ってきたら行方をくまらずに決まってる。ココヤシ村を救うには戦う以外に選択肢は無いんだ。

タクミなら何とかしてくれると思った時も何度かあった、でも相手

にはタクミを出し抜いた海軍の大佐まで味方についている。もうどうしていいのか解らない……

不意にタクミがわたしの肩に手をかけ笑顔を浮かべると力強く言った。

「大丈夫！！俺達を信じる！！」

……涙が零れそうになる。どうして……どうしてそこまでしてくれるんだろう。わたしは何もしてあげてない。みんなが手を貸してくれるのかも解らないのに。タクミは”俺達”と言った。

……わたしはみんなの事を考えてた。とっくに仲間だと言ってくれたルフィの事を、不安な時に黙って傍にいてくれたゾロの事を、村のために一人で身体を張ろうとしていたウソップの事を、そして、クロに仲間の大切さを叫んだタクミの事を。

……わたしの決意は固まった……アールンと戦うんだ！！みんなに頼るだけじゃない、わたしも戦う！！！！

だからみんなに本当の事を話そう。きつとみんなは聞いてくれる。

・・・わたし達は”仲間”だから。

S
i
d
e
O
u
t

ナミの決意（後書き）

後書き 各話ごとのアクセスを見てみると、これだけ影が薄くなっているにも関わらず、ルフィ単独の”殺す覚悟”が1番反応が良かったので、同じ形式をナミでやってみました。

感想・評価お待ちしております。

”素敵マユゲ”（前書き）

サンジカッコイイですよね。

ほとんどが戦ってる時限定ですけど。

”素敵マユゲ”

なんとか、ナミにアロンと戦う事を承諾して貰えた。もちろんネズミの船でそんな帳簿は見えていない。事実を知っている、ただそれだけだ。

実際にアロンに一億ベリを渡して様子を見ても面白かったのだが、コイツらと行動を共にしていたらまた出しゃばってしまうかもしれない。クロの時は力を試してみたくなくなって正直やりすぎた。

その場のノリで”鷹の目”なんか挑んで万が一殺されてしまったら最悪だ。”鷹の目”が俺を将来性ありと判断して生かしておく保障は何処にも無い。全力でやりあったら負ける自身があるからな。

クリークと”鷹の目”との戦いはあいつらの成長に必要な事だろう。どうセルフィは開放されないし、サンジを気に入って連れて行くこととするはずだ。クリークとの戦いが終わらない事にはサンジは決意しないだろう。

適当なことと言って俺とナミはここで役に立たないウソップと一緒にココヤシ村で潜んでおく事にしようと思う。

ナミと軽く打ち合わせをして俺が事情を説明する事にして甲板に戻る。

「ゾロ、ルフィはまだ戻らないのか？」

「ああ、派手にぶっ壊したからな。一ヶ月くらい雑用でもさせられんじゃねエのか？」

「それは問題だな・・・飯のついでに様子を見に行ってみよう」

「お前はもう食ったんじゃねエのかよ？」

「俺もさつき着いたばかりだよ。店に入るところで揉めてたらいきなり大砲の音がしたんで出てきてみたら・・・あれだよ。気をつけろよ、ホール長がいらないらしくてとんでもない接客するウエーターに出迎えられたからな。殴る寸前で我に返ったよ、ある意味ルフィに感謝だな」

「・・・よっぼどひでエんだな」

「いらっしゃいませイカ野郎、へボイモ恐れ入ります、おとといきて下さい、だったかな」

「そんなウエーターいるかア！！俺がいるからってお前のポケを全部拾うと思うなよっ！！」

「”ツツこみ”のウソップだろ？そんな事じゃ世界は取れないぞ？」

「狙撃手” だつつうの！！！ルフィが決めたんだからお前も受け入れる！！！！」

「ああ、わかった」

「・・・ボケろよ！！！？そこでボケるのがお前だろ！！！！俺と二人で世界を目指すんじゃないかねエのかよ」

「おい、遊んでねエで行くならいくぞ」

「・・・タクミ本当にわかってるの？うまく説明してくれるんでしようね？」

「大丈夫だよ。みんなを信じてるんだろ？ルフィなら二つ返事です承するさ」

「何の話だ？」

「ああ、ルフィも揃ってからみんなに話すよ。さあ行い」

「……………俺を無視するなア————！！！！！！」

ウソップはやっぱり”ツツこみ”だった。

Side ゾロ

おれ達は今レストランで飯を食っている。タクミが話があると言っていたのが気になってはいたが、料理がうめエからウソップも機嫌をなおしたみてエだしおれも食事を楽しむことにする。

タクミとナミが珍しく酒を飲まねエからおれもやめておいた。やっぱり重要な話みてエだな。暫くするとルフィがやってきて1年間の雑用を言い渡されたと言う。

「で？ルフィは何日で赦して貰うつもりなんだ？」

タクミの言ってる意味が解らないでいると

「1週間だ。1週間で許して貰うっておれは決めたんだ！！」

なんて勝手な理屈なんだ。タクミはルフィのこんなところまで見抜い

てたのか。

暫く考え込んでからタクミは口を開く

「1週間じゃ手遅れになるかもしれないな・・・チーム分けをしないといけないみたいだな」

「・・・チーム分け？」

何の事が解らずタクミに聞く。ルフィとウソップも同じなようだ。ナミは表情が読めねエ。

「そうだな、まずは話を聞いてくれ・・・」

そして語りだす、ナミの事情とタクミの先日の行動の真意、そしてタクミが掴んだナミの村の危機

ここんとこナミが悩んでいた理由がようやく解った。自分の為に危険を犯して海軍との取引に行ったタクミを心配していたんだ。おれの考えは半分正解って所だったんだな。ルフィはともかくおれにはあの時本当の理由を言えばよかつたんじゃないかねエのか？

ルフィは黙ってタクミの話の話を聞いている

・・・それでこうなった以上、俺は総力戦でアールロンに立ち向かうしかないと思ってるんだけど、構わないだろ？」

まるで夕食のメニューでも決める時みてエな気軽さでタクミはおれ達に決をとる。ナミは隣で少し不安そうにしている

「当たり前だ！！！！！」

即答するルフィ

「お・・・おう！！・・・ぎよっ、魚人がナンボのもんじゃーい！！！！！」

明らかにビビッてはいるが自分を奮い立たせて賛成を表明するウンツプ

仲間の為だ、おれにも異論はねエ

「構わねエ」

そっけない返事になってしまったが、ナミにはこれさえ伝わればいい。おれ達はお前の為に戦うと

「ありがとう・・・」

ナミは泣いてた

「ほら、大丈夫だったろ？」

タクミは笑ってた

おれ達は今後の行動案をタクミに説明される。皆が了承してナミがまたお礼を言っていると、なんか”素敵マユゲ”な男がひどいテンションでやってきた

「ああ海よ、今日という日の出逢いをありがとう。ああ恋よ この苦しみにはたえきれぬ僕を笑うがいい。あなたに涙は似合いませんよ？お姫さま」

ナミはキョトンとしている

・・・おれは本能的に理解した・・・コイツとはあわねエと

S
i
d
e

O
u
t

”素敵マユゲ”（後書き）

次回から主人公チームとルフィチームに分けます。

前述の通りルフィチームは書きません。

数話先にスーパーダイジェストが載りますがほぼ原作通りの事がおきてる設定です。

タクミの言葉やナミが待っているという事による心情変化があるにはあるんですが割愛させていただきます。

”ナミorハーレム派”対”ロビン一択派”の関係は現在7:5となっております。

ちなみに”ロビン完全否定派”の意見は抹殺です。ロビン票を減らしたりはしませんのでロビンを攻撃しないでください。

感想・評価お待ちしております。

ウソップの決意？（前書き）

先行チームは平和です。

ウソップの決意？

S i d e ウソップ

おれ達は今、レストランを出てナミの暮らしていたココヤシ村に向かうメリー号の上にいる。タクミは甲板でタバコを吸っていて、ナミはその近くで本を読んでいる。そして、おれはというと「見張り、お願いね」とナミに言われてメインマストの見張り台の上だ。

ナミのヤツおれを追っ払いたいただけじゃねエのか？今までは本を読むなら船内だったじゃねエか。タクミとナミってこんなに仲良かったんだな。

大体あの時はすんなりこのチーム分けに納得したけどこれっておれを雑用に使ったためじゃねエのか？・・・そうなのか？・・・いや、タクミはおれをからかうのを心底楽しんでるみてエだけどそんなことは考えないだろう・・・一応聞いてみるか。

「・・・なあタクミ、そういえばなんでおれがこっちのチームなんだ？」

「んー？簡単なことだろ？現在の戦力を均等に分配しただけのこと

だ
」

なるほど、ルフィもゾロも強いのはクロネコ海賊団との戦いで知ってる。でもタクミが一番強いんだろう、ナミもかなり強かったな・
・
・
・
ん？

「
・
・
・
・
!??
ってそれはおれが弱いつてことかア!!!」

おれはかなり憤慨した

「
・
・
・
・
ウソツプって強かったっけ?この数日でレベルアップしたんだ、やるじゃん。こっちのチームに入れて悪かったな」

ここの野郎!!!?人が真面目に聞いているのに、バカにしたボケをかますとはやってくれるじゃねエか・
・
・
そうだ、おれはコイツをムシするって決めてたんだ。今こそ実行の時!!!今後コイツとは口を聞かん!!!

ボケをムシされる事ほど辛いことは無いだろうツツこみの大切さを
思い知るがいい!!!

「
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
」

「そんなに落ち込むなよ、頑張つてナミを超えるところから始めてみる」

タクミは慰めてきた。つてことはさっきのはいつものポケじゃなくて本気でいつてたつてことだおれはなんかムカついてきて、ムシ発動中だったが思わず言い返した。

「・・・本気で言つてたのかよ！！余計にタチ悪いぞお前！！今までも全部本気か！！喧嘩売つてんのかコラア！！」

「はっはっはっは！！・・・そんな訳ないだろ？ルフィは一週間離れられないし、ゾロはあそこに居れば”鷹の目”に会えるかもしれないから残したんだ。後の俺達三人は直ぐに向かったほうが効率的だろ？あとお前ヨサクとジョニーのこと忘れてないか？まああいつらは案内役として置いて来たしゾロの傍を離れないと思つたらだけだな。戦力的には大差ないだろ？もつと自分に自信をもて！！あと、ツツこみがくどいから何とかしてくれ」

結局冗談だったらしい。ふざけやがつて最初からそう言え！！いや、被せポケに対応できなかったおれがいけなかったのか？・・・！？

「ツツこみはもういいだろうがア！！」

「・・・ツツこんでるじゃない」

……おれもう”ツッコみ”でいいや

Side ナミ

タクミはウソップといるときが一番楽しそうかもしれない。そう思うと何か意地悪したくなってウソップを見張り台に追いやってしまった。

タクミは例の大佐に貰ったっていうタバコを吸っていて何か真剣な顔して考え込んでいるから近くに座って本を読む事にした。

暫くするとウソップが降りてきてまたタクミと漫才をはじめた。

はあ、やっぱりわたしといるときより楽しそう。

わたしはウソップが少し羨ましくて話に割って入った

「ツッコんでるじゃない」

呆けているウソップの顔はかなりおもしろくて

わたしはタクミと声を上げて笑った。

S i d e O u t

ウソップの決意？（後書き）

中身がなさ過ぎました。軽く流してください。

今回は久々にタクミオンリーの予定です。

アイザワ・タクミの履歴(前書き)

能力開発の話です。

アイザワ・タクミの憂鬱

ダメだよっぱり出来ない。俺は自分の今後を考えて憂鬱になる。

俺は自分のことを「生命帰還特化型六式」使いだと認識している。悪魔の実はパワー的な補助にしかなくていい。このスタイルにしたのはいくつかの理由がある。

一つ目は俺と同じ肉食獣の能力者で「六式」使いのルツチが、動物系は鍛えれば鍛えるほどとかいつていたが、ただの「六式」使いを目指しても指導者がいない以上「六王銃」へは行き着けないと思っただからだ。

「六王銃」はできれば習得したかった。「覇気」でも「衝撃貝」でもないのにルフィにダメージを与えていたから打撃無効の能力者を相手どる際に便利だと思っただけなんだが、それなら後に「覇気」を習得した方がよさそうだ。たぶん「覇気」の方が教えてくれそうなきゃら多いからな。

他の理由はまずこのスタイルなら「生命帰還」さえ極めれば複数の能力を同時に鍛えられるからだ。基本的にどこにいても修行が可能。な「生命帰還」をスタイルの根源にすれば何かと都合がいい。

そして理論の異なる「六式」を使う俺はおそらく多くの「六式」使いを困惑させることが出来るはずだ。対「六式」使いを入念にシミュレーションするのはもちろんCP9との戦いに備えてだ。ココばかりはロビンの為にも無双させてもらおう!!

……そのつもりだったんだが最近伸び悩んでる気がする。このままでは無双は無理だろう。原作キャラはゾロ以外修行してるのを見たこと無いのに、何であんなに次々と新技を繰り出していたのかかなり謎だ。

みんな隠れてやってたのか？深夜に一人でクルクルと回るサンジを想像してしまった。

とりあえず落ち着いたらゾロのトレーニングに付き合ってみよう。長い間、純粹に力を鍛えるようなトレーニングをやっていないから何かが見つかるともしれない。

さっきからタバコばかり吸っているのだが実はこれも修行のつもりだ。空気と一緒に静一杯煙を吸い込んでそれを体の一部と捉えてみる。吐き出した煙を何とか操れないかと思っているのだが無理みたいだ。

いや、イメージは大切だ出来ると思ってなきゃ出来ないだろう。この身体がタバコに馴染んでくれば使えるかもしれないので銘柄は変えないようにしようと思う、自分に制約をつけるとイメージは固まりやすいはずだから。

スモーカーの煙のような物理的拘束力が無くても、相手の顔にでもまわりつかせる事が出来れば小技として使えるだろう。そんな小技を努力して習得するのはバカみたいに思えるかも知れないがタバコ吸ってる時間の有効活用だ。

「生命帰還」の修行になって、能力開発できて、リラックスできる。
一石三鳥の名案だと思っている。

暫く修行に集中しているとウソップがやってきたので適当に相手をしてやってたら最後にナミがウソップにツッコんだ。

・・・このままでは全員がお笑いキャラになってしまうかもしれない。

麦わらの一味の今後が少し心配になった。

アイザワ・タクミの憂鬱（後書き）

煙の件は「念」っぽいですね。主人公はハンター×ハンターの方が全体としては好きだったので影響を受けてる設定です。

ガイモンと暫く出会わないでハンター世界と勘違いしたまま「念」習得にむけ完全に無駄な努力をする主人公というのも最初考えていました。

「生命帰還」はかなりの拡大解釈をしています。何でも出来そうな気がしませんか？あのクマドリの姿を見ると、二日酔いのアルコールとばしたり、ニコチンとってもタールは取らないとか、強欲さんの最強の盾とか使ったりできそう。

「鉄塊」要らないですね。

感想・評価お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3875ba/>

百獣の王

2012年1月15日02時46分発行